湿地と島の文学論－アイスランド現代小説を中心に－

都留文科大学　文学部　比較文化学科
15220133
山本多香良

[目次]…

序章 2
第 1 章　ミステリー小説としての『湿地』における人間性 5
1.　エーレンデュル・スヴェインソン(Erlendur Sveinsson) 5
2.　ホルベルク(Holberg) 10
3.　エイナル(Einar) 12
4.　エヴァ＝リンド(Eva=Lind) 14
5.　マリオン・ブリーム(Marion Briem) 16
第 2 章　島の文学としての『湿地』 18
1.「夢の島」 18
2.　「実験場の島」 20
3.「チェスの駒としての島」 25
第 3 章　湿地の文学としての『湿地』 30
1.　ノワールの舞台としてのアイスランド 31
2.　文学の湿地 32
3.　現実の湿地 36
最終章 39
[参考文献] 41

序章

最北の首都、レイキャヴィク[1]に建つアパートの一室で行われた典型的なアイスランドの殺人を始まりとする陰鬱なミステリー小説[2]、『湿地』はアイスランドの首都レイキャヴィクの作家アーナルデュル・インドリダソン(Arnaldur Indriðason, 1961-)によってアイスランド語の原作が 2000 年に刊行され、2012 年に柳沢由美子によって日本語に翻訳されたミステリー小説である。アーナルデュルは大学で歴史学を専攻し、作家としての活動の前にはジャーナリストとして活動していた経歴があり、その経験は小説内の土台となる歴史的事実への造形の深さや、努めてリアリスティックな視点で現代アイスランド社会を見る主人公エーレンデュルの眼へ活かされている。またアーナルデュルは現代アイスランドを代表する作家の一人であり、アイスランドにおいて「ミステリー小説」というジャンルを開拓した重要な作家でもある [入江浩司, 2016]と同時にスカンディナビア犯罪小説(Scandi-crime)、ノルディック・ノワール(Nordic Noir)の作家としても知られている。

本論ではまず『湿地』を、「人間の弱点や人間性の暗部を探求する上で格好のジャンル」[廣野由美子, 2009]であるミステリー小説であるという観点から登場人物たちの人間性を考察する。次に人間性を主題にしたミステリー小説において、非人間的な景観は単なる舞台背景としてのみ機能しているように見える一方、物語全体の問題意識やテーマを投げかける効果をもたらす題辞に付された「この物語はすべて広大な北の湿地（ノルデユルミリ)(以下：ノルデユルミリ)のようなものだ」という主人公エーレンデュルの台詞から、むしろこの『湿地』の舞台背景に据え置かれているものこそがこの物語の主軸であるのではないかという視点から、その舞台背景を前衛化させて再解釈を行い、ここからそれぞれ検討を行った『湿地』の登場人物の人間性と『湿地』の舞台背景であるアイスランドという「島」と「湿地」との相互作用を検討するものである。

第 1 章では、先述のミステリー小説は人間性を追求することに長けた文学形態であるという観点から、各登場人物の人間性を考察する。この観点に関しては、『湿地』の巻末にある川出正樹による解説の中でアーナルデュルが、「犯罪小説は“人間の条件”(human condition)を描く文学」であるよう心がけていると述べている作家であるという観点からも(『湿地』: p. 389)、ミステリー小説を人間中心に捉える意義を見いだせるであろう。

ミステリー小説はその小説のジャンルそのものにこれは文学か否かという論争があり、廣野(2009)によればミステリー小説に対する評価は大きく分けて 3 つに分類することができる。1 つが、ミステリー小説は『探偵小説作法 20 則』(ヴァン・ダイン)や『探偵小説十戒』(ロナルド・A・ノックス)のように明確なルールのある、「純然たる謎解きゲーム」で

---

[1] 本論における人名及び地名は『湿地』の日本語訳者柳沢由美子の使用する物に準じる。

[2] 本論では「ミステリー」、「推理小説」、「犯罪小説」、「探偵小説」の語があるが、これらを分ける明確な定義は無い。ここでは犯罪小説は事件や犯罪を中心に扱った小説、探偵小説は事件や犯罪を探偵役の人間が解決していく小説、推理小説は主に犯罪に関係する謎が論理的に解決されていく過程を書いた小説とし、いずれも「謎」が物語の中心となるミステリーの一種とする。

あるとするものである。これに対抗した第２の立場はギルバート･K･チェスタトンが『探偵小説を弁護する』で述べたように「多くの探偵小説はシェイクスピア劇の一つに負けず劣らずセンセーショナルな犯罪に満ちている」が故に文学史上に位置づけることが可能な芸術作品とする立場である[2003　ヘイクラフト 2003:120-121]。この２つの折衷的な立場が第３の立場で、『探偵小説の芸術的な地位』で「最も厳密なミステリーは、純粋な分析の問題であり、きわめて人工的な限界のなかできわめて洗練された芸術作品であ」るとその価値を認めつつ、「純粋な分析から離れるほど、芸術的に統一できない」ミステリーを「文学的に最高のレベルに達することはない」とその限界を認めるドロシー・セイヤーズなどがこれに該当する [廣野由美子, 2009][2003 ヘイクラフト:77-79]。このように文学としての評価することの是非が問われるミステリー小説はその作者は文学史の中では軽視される傾向にあるが、それはアイスランドにおいても例外では無い。ネイマン(Neijmann)は、『湿地』の著者であるインドリダソンがアイスランドを代表するミステリー小説作家であり、様々な賞を受賞しているにもかかわらず、アーナルデュルの著作に対して「アイスランドの文学界が驚くほど沈黙を保っている」と、文学界において彼が取り扱われないという「奇妙な」立ち位置にいる状況を指摘している [Neijmann, 2017]。本論は「ミステリー小説」の文学的な立ち位置の決定を目的とするものではないが、「ミステリー小説」の物語にはただの娯楽以上の価値があり、作品の執筆された当時の社会を色濃く反映したものでもある。この視座から、ミステリー小説は考察し検討する意義を十分持ち得ることは確かであるという立場で本論を進行させる。

また『湿地』においては事件の解決という本筋の周辺に様々なエピードが散りばめられ、登場人物の内面をより重厚なものにしている。本章ではミステリー小説という形態のなかで浮かび上がる、個人ではどうしようも無い強大な力―国家権力、時間の流れ、遺伝など―やそれに端を発する殺人事件という非日常的な極限状態に対峙する人間の困惑や恐怖に置かれた人間の状況を考察していく。

第 2 章、第 3 章では『湿地』の中の「自然」を、ただの舞台装置ではないものとして前衛化させて議論を行い、第１章で扱った人間性との相互作用を探る。第２章では、『湿地』の舞台がアイスランドという小さな島であるという事実に着目した考察を行う。島は様々な制約、遠隔性、矮小性、隔絶性、周辺性―これらを総称した島嶼性の影響を何らかの形で受け続けている [スティーブン･A･ロイル, 2018]。無論アイスランドもそれらの制約を受けている国であると当時に、『湿地』における事件に関連する様々な事象、実在の私企業をモデルにしたアイスランド遺伝子研究所や歴史的事実に基づくノルデユルミリの半地下のアパートには、相対的に小さな島国であるアイスランドが受けた島嶼性の影響を認めることができる。本章では長年「ロマンティックな島」の言説や中世趣味の舞台となってきたアイスランドへの眼差しを確認すると共に、それとは相反する「現実的な島」を語る『湿地』の間にある絶対的なギャップについて論じる。また主人公エーレンデュルの持つ孤独は非常に重層的であり、そのなかの 1 つに島に生きる者としての孤独があることを論

じる。

第 3 章では、物語の起点であり、重要な事件解決の鍵を多く含む土地であり、エーレンデュルが飲み込まれんとする一方で『湿地』の後背に置かれている湿地そのものについて考察する。ここでは同じく湿地を舞台とする現代推理小説や湿地が登場する物語との比較を交えながら、湿地が物語においてどのようなものとして理解され、どのような象徴として描かれているかを探る。多くの物語において湿地は近現代と対比される「未開」の象徴の場所であり、死を連想させる場所でもある。前者においては、近代化と進歩の名の下に人類がわずか一世紀の間に世界の湿地面積を 50%も減少させたという事実からも明らかなことであり、後者の湿地と死の結びつきに関してはその歴史は初期ロマン主義にまでさかのぼることができる。特にダンテ、ミルトン、イプセンといった思想家・作家、そして本稿で扱うエドガー・アラン・ポーやトルーマン・カポーティにとって湿地は死や悪の象徴、またはそれそのものであり、湿地帯とは悪行や病が蔓延る地獄のような場所として描かれている [Jan Kolen, Hans Renes and Rita Hermans, 2015]。

次に湿地の定義や性質を確認したうえで物語の『湿地』の再解釈を試みる。ラムサール条約によれば湿地とは、「天然のものであるか人工のものであるか、永続的なものであるか一時的なものであるかを問わず、更には水が滞っているか流れているか、淡水であるか汽水であるか鹹水（海水）であるかを問わず、沼沢地、湿原、泥炭地又は水域をいい、低潮時における水深が 6 メートルを超えない海域を含む」（条約第 1 条 1 ）と定義されるものである。ここでは湿地を、水の流れとよどみを受け止める肥沃な湿った土地として解釈した上で、同じく時代の流れとよどみを見るエーレンデュルの姿と重ねることでこの章の結論とする。

第１章　ミステリー小説としての『湿地』における人間性

本章ではミステリー小説に不可欠な探偵、犯人、被害者の役割をあてがわれている主要人物や、これらの登場人物を取り巻く重要人物を取り上げ、その各人物像を考察する。ここでは人間性を考察するために、各登場人物の言動や名前を検討し、その人物像に迫る。また2，3章では主人公であるエーレンデュルを中心に考察を展開するために、本章でもエーレンデュルに関する考察が中心となる。

『湿地』には巧妙なトリックや残酷な殺害描写が存在せず、むしろ人間性に重点が置かれているが故に登場人物たちの描写が多い。殺害方法に複雑性が無く、また映画版『湿地』では犯人であるエイナルの顔が早くに明かされ、エイナルが犯人であることの仄めかしが早くから行われることから、「何故犯行を行ったのか」（ホワイダニット/Why done it ?）に重点が置かれていることが分かる。むしろ「誰が犯行を行ったか」（フーダニット/Who done it?）や「どうやって犯行を行ったか」（ハウダニット/How done it ?）が単純化されている分、重厚な人間描写から導き出される「何故」という疑問が際立っているとも言えるだろう。

1. エーレンデュル・スヴェインソン(Erlendur Sveinsson)

エーレンデュル・スヴェインソン(以下エーレンデュル)は、『湿地』を含む A Reykjavík Murder Mystery シリーズの主人公となる、『湿地』の時点では 50 歳の捜査官であり、特筆すべき性質を数多く持ち合わせたキャラクターである。その性質の 1 つが、彼が作者インドリダソンによって「できる限りアイスランド人らしく」造形された [Jóhannsdóttir, 2014]上で「異邦人」という意味の名前(＝エーレンデュル)を与えられている点にある。事実、『湿地』に続く『緑衣の女』では、ある登場人物に「エーレンデュルといいます」と名乗った彼にその人物が「外国の人ですか？」と問う場面がある(2013 インドリダソン:393)。ここで述べられる「アイスランド人らしさ」の要素の 1 つとして挙げられるのが、アイスランドのノーベル賞作家ハルドウル・ラクスネス[3]の代表作『独立の民』の主人公ビャルトル等に見られる、自主独立の生き方を選び取るというアイスランド人の理想像に近しいというものである。ハルドウル・ラクスネスの作品の主人公達には「自らの運命を受け入れ、しかし信念は決して曲げず、権力に抵抗してしたたかに生き抜く姿」が見られ、エーレンデュルにも共通するものが見られる[入江, 2016]。しかし、ハルドウル・ラクスネスの主人公達の姿に漂う「自主独立」という雰囲気は、第二次世界大戦以降から 2006 年の完全撤退まで米軍の駐留を許し、海外企業を多く誘致し、2008 年の金融危機を受けて観

[3] 『湿地』での時代設定は 2001 年であり、この時点で 50 歳であるエーレンデュルは 1951 年生まれと推測できる。1955 年にノーベル賞作家を受賞したハルドウル・ラクスネスは 1950 年-1960 年生まれの人々によって国民的英雄と見なされている [Caviglioli, 2017]。

光立国への道を選び、その過程で大きく姿を変えた現代のアイスランドの価値観では「孤立」へと姿を変える。同じ孤独な状態を指す独立と孤立は、本質的に同質のものであるが故に、エーレンデュルは「異邦人」へと成り果てたのである。エーレンデュルは東アイスランド地方の出身の中年の現場捜査官であり、離婚を経験し、自身の子ども達に嫌われている孤独な生活を送る人間である(インドリダソン 2012:22)。まず彼の容姿に関しては『湿地』の中で、彼のメンターとしての役割を果たすマリオン・ブリームの視点から以下のように描写される。

> 目の下に黒い隈のある疲れ切った目の前の中年男を見透かしている。ここ数日剃っていないヒゲの生えた頬。跳ね上がっているもじゃもじゃの眉。赤茶色の髪、色の無い唇からときどきのぞく真っ白い歯、人間の裏世界に潜む悪事の数々を見てきた顔に浮かぶ憂鬱な表情。(インドリダソン 2012:166)

映画版のエーレンデュルに関しては、2016 年に映画化した『湿地』の中でもエーレンデュルはアイスランド出身の俳優イングヴァール・E・シーグルソン(Ingvar Eggert Sigurðsson)が演じている。また「憂鬱な表情」からはノルディック・ノワール[4]の作家として知られ、そのジャンルの先人たちの影響を認めるアーナルデュルが、エーレンデュルにもそのジャンルの主人公の持つ属性を付与していることが見受けられる。ノルディック・ノワールの主人公達には「憂鬱で「欠陥」のある刑事である」(melancholic and 'defective' police detectives)という属性が付与される事が多く、エーレンデュルも現代アイスランドに生きる「異邦人」としての諦観や憂鬱は物語の随所で見られ、また元妻や子ども達との良好な関係の構築に失敗し、頑固かつ不器用で、現代アイスランド社会に対して不適合とも言える状況にあるという欠陥を抱えている[Neijmann, 2017]。

典型的なアイスランド人の容姿を持つとされ、「世界で最も本に親しむ国」[5]として知られるアイスランドの人間らしく読書家なエーレンデュルが「異邦人」である現場は家、職場と様々である[Caviglioli, 2017]。まず家という日常空間でエーレンデュルが現代のアイスランド人から大きく逸脱するのは、読書以上の数多の娯楽が登場してきた現代アイスランド社会において読書、しかも自然災害などで行方不明になった人物に関する本に大きな

---

[4] ノルディック・ノワール(Nordic Noir)とは、スカンディナビア犯罪小説(Scandinavian Crime Fiction, Scandicrime, le polar polaire, or Schwedenkrimi)とも言われる、北欧 5 国(スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フィンランド、アイスランド)出身の作家による様々なジャンルの作品群を指し、その作品形態も小説・映画など多岐に渡る。これらの作品群の大部分の共通点としては①スティーグ・ラーソン効果、②福祉国家批判、③(あくまで相対的な)男女平等と強い女性キャラクター、④エキゾチックな風景と環境、⑤英米犯罪小説の伝統との強い結びつきの他、憂鬱で「欠陥」のある刑事の登場などの副次的な要素も含めることができる。[Bergman, 2014]

[5] 本に親しむというのは単に国民一人当たりの読書量が多いだけでは無く、物語の書き手としての側面からも言える事である。この状況を表わすように、「アイスランド人がまだ自分の本を出版していないとすれば、それは書いている最中ということ」という諺がある。[Caviglioli, 2017]

関心を持ち、スーパーで購入した「けばけばしいカラー写真を使っ」たアジアの料理と説明される、エーレンデュルに言わせれば「正体不明の食べ物」を拒絶し、固いライブレットや羊のレバーペーストを好み、更に映画ではスヴィーズという羊の顔半分を焼いて煮込んだものをナイフでほじくってそのまま食べるシーンにある(インドリダソン 2012:22)。現代アイスランドの国民食はホットドッグであり、入植当時から続く魚や羊の料理も残るものの、現代では珍味として親しまれており、個人差はあれ広く日常的に食べるものではない。レイキャヴィクの家政学校に迫るドキュメンタリー映画『主婦の学校』(原題『Húsmæðraskólinn』,2020, 監督: ステファニア・トルス)でも上述のスヴィーズを作る過程があるが、これは現代消費社会を反省し限られた資源を有効活用する術を教える家政学校の「伝統料理」の作り方を残す試みによるものである。またエーレンデュルは読書家であり、アイスランドのノーベル賞作家ハラルド・ラクスネスの本への言及も見られるものの、遭難に関する本や遭難者や行方不明の者への関心は一際高く、常に頭の片隅に遭難者のモチーフがあり、これは自身の弟が幼い頃遭難し行方不明のままであることに端を発する。行方不明者の捜索というモチーフは物語の中にも同時進行的に見られるもので、元妻の依頼を娘エヴァ＝リンドを通して受けたガルタバイユの消えた花嫁の捜索や事件の被害者ホルベルクの友人グレータルの捜索が挙げられ、またエーレンデュルは捜査の過程にある様々な人物との会話の中で、過去に読んだ遭難者を連想することさえある。日常的に多くの本を読み、「伝統」的な料理を好むエーレンデュルの姿は、むしろアイスランド外部の人間が考える「アイスランド人らしさ」を一般化、具現化させたものにも見える。そしてエーレンデュルは、そういった「アイスランド人らしさ」に固執しているかのような言動をすることもある。

職場でのエーレンデュルは、主に捜査方法や現代技術の駆使という点で同僚たちと対立し、孤立した立場にある。意見を対立させる主な相手がシグリュデュル＝オーリ[6]という若い男性捜査官で、「背が高くエレガントで、アメリカの大学で犯罪学を勉強してきた」経歴を持ち、聞き込み調査や現地調査に重きを置き、しばしば独断行動を取るエーレンデュルとは対極的に「最新式で組織だった」捜査を行いたがる人物である(インドリダソン 2012:49)。シグリュデュル(Sigurdur)という名前には「平和の守護者」という意味があり、意見を違えることが多くも共に正義を志す人間であるが、シグリュデュル＝オーリやもう一人の同僚である女性捜査官エリンボルクはエーレンデュルの最新式のものへの無知さに度々辟易する。次に示すのはその一例となるシグリュデュル＝オーリから始まる殺人事件が起こってすぐのエーレンデュルとの会話である。

---

[6] シグリュデュル＝オーリとエーレンデュルは私生活の面においても対照的な存在である。シグリュデュル＝オーリはベルクソラというパートナーと同居しており、エーレンデュルはパートナーと離婚して独り居である。また「エーレンデュルが家でアイスランドの書物、歴史、文学を読んでいるとき、シグリュデュル＝オーリはテレビの前に座り、ポップコーンを食べコカ・コーラを飲みながらアメリカの刑事ドラマを観る」(『厳寒の街』p. 112-113)という描写もある。

「あの男(＝被害者ホルベルク)のプロファイルを作るべきじゃないでしょうか？彼のことをもう少し知るために」
「プロファイル？なんだそれは？横顔(プロファイル)のことか？ホルベルクの横顔の写真が欲しいのか？」
「彼についての情報を集めることですよ。わかっているじゃないですか！」
「一般の人々は今度の事件のことをどう思っているんだ？」(インドリダソン 2012:49)

その他にもハードディスクやダブルクリック、サーバーといったパソコンの基礎的な用語の意味や概念そのものを理解していなかったり、初めて新しい規則として導入された青いライトを上に載せてパトカーを走らせるという体験をしたりと「犯罪捜査課の中で最も経験のある警察官の一人」であるが故に最新の知識や機器に疎く、職場の上司や同僚から頭の固くて古い人間だと遠ざけられていることを示唆する描写がある(インドリダソン 2012:102,49)。エーレンデュルが過去に固執する姿は、「過去をすっかり忘れるつもりはない」と断言し、メンターであるマリオン・ブリームの助言や捜査の過程で得た過去に関する知見を現在に持ち込むことをいとわないエーレンデュルが、過去のアイスランドの姿をシグリュデュル＝オーリやエリンボルクへ語り聞かせるように話す様子からも明らかである(インドリダソン 2012:79)。しかし何らかの欠陥を抱え、孤立的な状況に立たされているエーレンデュルではあるが、シャーロック・ホームズのような超人的な推理力や、ポアロのような卓越した観察力を持つような人物ではなく、あくまで普遍的な人物であることも確かである。

作者アーナルデュルは自身の登場人物たちに対して 「強力なキャラクター性」(strong characterization)と「リアリズム」を組み合わせた人物とし、それはアーナルデュル自身が影響を受けた作家たちの小説から、犯罪を扱う小説の主人公は必ずしも、例えばジェームズ・ボンドやフィリップ・マーロウのような「マティーニの似合うスーパーヒーロー」(martini-drinking superhero)である必要は無く、「貴方や私のようにただの普通の人間である」(just a regular guy like you and me)ことを学んだからだと言う [Jóhannsdóttir, 2014]。そして普遍的な個人であるからこそ、「汚くて無意味で、(中略)典型的なアイスランドの殺人」に見えたホルベルクの事件の背景にある、個人では到底太刀打ちしようのない人間社会全体の暗部や社会の潮流に際して酷く動揺するのである。それが象徴的に現れるのが彼の見る悪夢である(インドリダソン 2012:18)。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスによれば悪夢とは、「我々が特別の注意を払うべき夢のタイプ」であり、日常という「昼の芸術」を浸食するものである [ホルヘ・ルイス・ボルヘス, 2019]。またアイスランドを代表する文学『サガ』においても、夢は予言的で象徴的なものとして頻出するモチーフである [谷口幸男, 2017]。物語の中盤でエーレンデュルが見る

夢では、彼の「昼」の領分、つまり日常部分や私的領域の象徴であるエヴァ＝リンドが登場し、その浸食や混濁により、彼の日常が脅かされつつあることが象徴的に示され、またその後の墓暴きが予見されている。。

> 夢の中のエヴァ＝リンドは今まで見たことがない格好をしてどこからか照らされているのか分からない光の中ですそが足首まで届くきれいな夏のワンピースを着て豊かな黒髪を背中まで垂らした完璧な姿で夏のいい香りまでかいだような気がしたと思ったとたんエヴァ＝リンドは彼のほうに向かって歩き始めたがじつは浮かんでいたのかもしれないというのも地面に足がついておらずどこなのかわからないがわかるのは明るさとその光の中で彼のほうに向かってくるにっこり大きく笑ったエヴァ＝リンドだけ抱きしめようと彼は両腕を開いて待つが彼女は来ずその手に持っている写真を差し伸べるとあたりが暗くなりその写真はよく知っている墓地で気がつくと彼はそこにいて暗い空を見上げると顔に雨が降りかかり足下を見ると墓石が倒れて墓が開いて棺が見え中に腹から肩まで切り開かれた女の子が横たわっていて突然目を開けて彼を見つめ口からは恐ろしい悲鳴が墓の中から（インドリダソン 2012:134-135）

ここで引用した夢はエヴァ＝リンドとの関係の修復の兆しが見え、同時に事件に遺伝性の病というキーワードが浮上する頃に見るものである。ここでエーレンデュルは私生活、つまりエヴァ＝リンドと捜査上で浮上してきた 4 歳で亡くなった少女を重ねているように見えるが、これはエーレンデュルが少女の母親コルブルンと母親になろうとするエヴァ＝リンドを重ねて見ていることや、エーレンデュル自身が「ホルベルクの事件のことでなにがわかっても、自分の中に取り込むんじゃないぞ！」と忠告を受けたにも関わらず、「距離などないのだ」と事件そのものに、彼の日常部分までもが飲み込まれていることが原因といえる(インドリダソン 2012:170,253)。夢の前半にあるエヴァ＝リンドの姿は「残っている良心を目覚めさせたかった」というエーレンデュルの父親としての願いであり、その次に現れる墓のイメージは「なぜこんな惨めな事に首を突っ込むんだ？」という事件解決のために脅かされる捜査官としてのエーレンデュルの良心の動揺を暗示している(インドリダソン 2012:252)。「夢のお告げだとか、輪廻やカルマも信じない」という現実主義的な側面を持つエーレンデュルにとってのこの悪夢は、単にこの後に行うウイドルの墓暴きを予見させるだけでなく、妊娠中にもかかわらず薬物を止められないエヴァ＝リンドや捜査で明るみになる過去の事実によって動揺する良心が夢の形を取って現れたものとも言えるのである(インドリダソン 2012:156)。

総じて、エーレンデュルは戦後世代に属するが故に「時代の変わった」現代社会全体の大きな変化に適用できない、しようとしないという意味で「異邦人」であり、その視点で現代アイスランド社会を見る存在である[Neijmann, 2017]（インドリダソン 2012:104)。そ

して日常生活や職場において自身が積み重ねてきた生活スタイルや信念を固持し、過去に固執する節がある一方で、不器用ながらも娘エヴァ＝リンドを愛する父親でもあるという至って普通の人間でもある。そして普通の人間であるからこそ、ホルベルク殺人事件に潜む社会の暗部に良心が苛まれ、動揺するのである。だがこのエーレンデュルの持つ、言わば「古き良きアイスランド人」の目で客観的に現代アイスランドを見るという「異邦人」としての視点と、個人としての良心を持つ者としての視点が、現代アイスランド社会、『湿地』においては現代の「ガラスの容器置き場」に対する倫理的な問いかけを読者に投げかけている。

2. ホルベルク(Holberg)

ホルベルクは『湿地』で主題となる殺人事件の被害者であり、物語の登場人物の中で同情の余地のない人物の一人でもある。「殺人者にはしかるべき理由があり、殺されるほうには殺されて当然と思える側面がある」と語るアーナルデュルにとって、ホルベルクという人物は過去に数名の女性に対してレイプを行い、それが罪に問われることのないまま素知らぬ顔で日常生活を送る極悪人である(インドリダソン 2012:377)。彼の屈折した欲望は、彼の家にある様々な物から垣間見ることができる。本棚に置かれた、ある少女への欲望を綴ったナボコフの『ロリータ』、動物もののビデオを指す D ビデオやゲイビデオを指す G ビデオのデータでいっぱいになったパソコンなどからは、彼がポルノに夢中な人物であることが明らかになる。更に友人グレータルを殺害するという罪を犯した人物であり、その死体を自宅の床下に四分の一世紀の間床下に埋めて保管していた。その一方でトラックの運転手としては職場で信頼された立場におり、同僚からはむしろ好意的な印象をもたれている。低所得者向けの住居であるノルデユルミリのアパートに住んでいることから彼が低所得者層に属していたことが分かるものの、同じアパートに住む住人とトラブルを起こしたこともなく、ホルベルクの語る、過去にレイプの事件を少なくとも 2 回起こし、その罪を問われることなく上手く逃げ切ったと自慢げにそれを話す人物とは大きく異なる。ホルベルク、その友人のグレータル、エットリデの 3 人は元々灯台・港湾労働者で、物語上の現在ではホルベルクはトラックの運転手、グレータルは死亡者扱いの行方不明者、エットリデは名の知れた犯罪者として服役している。

このホルベルクの友人であるエットリデに関しては、「筋肉の盛り上がった大きな体」を持ち、浅黒い肌で、耳にナチスの鉤十字のピアスを下げた外国人嫌いのサディストであるという描写がされている(インドリダソン 2012:106)。そして老齢のエーレンデュルをファシストと誹り、同席したシグリュデュル＝オーリをホモと呼んで嘲笑し、エヴァ＝リンドの名前を出してエーレンデュルを挑発する。ホルベルクが巧妙に女性を誘い出し、上手く言い逃れをして罪を逃れる犯罪者であるのとは対照的に、エットリデは粗野で直情的な犯罪者で、繰り返し投獄される人物として描かれている。ホルベルクの事件解決の鍵となるウイドルの墓の写真を撮影したグレータルは、ウイドルがホルベルクの娘であることを

知っており、それ故にホルベルクに殺害された人物である。自身の母親や異父妹から金品を盗み、また「写真は時代の鏡」と語って様々な写真を撮影して自身で現像し、一見ガラクタに見える様々な品を蒐集していた。物語の開始時点で既に死亡者扱いされているグレータルの記述は少ないものの、この物語の中心となる蒐集、湿地の遺体というキーワードに何らかの関連があり、エーレンデュルの関心事である行方不明者であるという点でも重要な人物である。

アーナルデュルのミステリー小説の特徴として、現在の時間軸と同時に過去の時間軸が進行していき、最終的にその 2 つの時間軸の出来事の結びつきや相互関係から事件解決の糸口が見えてくるというものが挙げられるが、この過去の時間軸をからは、事件の糸口だけではなく現在とは全く異なるアイスランド社会の有り様を見ることができる。『湿地』においてはホルベルクや、ホルベルクの被害者の 1 人で脳のない少女ウイドルの母親のコルブルンが被害を訴えた警察官ルーナルの姿からは、2023 年時点でジェンダーギャップ指数が大きい国1位の座を14年間保持している[7]現在のアイスランドの姿とは大きく異なる、1960 年前後のアイスランドの姿を想像する手がかりが散りばめられている。エーレンデュルのメンターとしての役を担うマリオン＝ブリームでさえ、現役の警察官であった頃に担当したこのコルブルンの事件では互いの証言が食い違っていたという理由から、加害者のホルベルクと被害者のコルブルンを偶然に見えるよう工夫した上で直接対面させるという、性犯罪者の被害者への対応としては最悪手とも言える手段を講じるといった過ちを犯している。先述のアーナルデュル作品の特徴の 1 つである物語上の現在と過去の 2 つの時間軸という観点から、忘却されつつある過去を掘り起こすという意味で、アーナルデュル作品の物語の出発点となる遺体が概念的に「下」から発見されることが多いというのは示唆的な点である。『湿地』では半地下のアパートの床とその床下から、『緑衣の女』では建設現場の下から、『声』ではホテルの地下室から、『湖の男』では水が干上がった湖の底から遺体が発見されるなど、少なくとも地上ではなく、そこから一段階下の場所にある遺体から物語が始まる。一方物語開始時点(2005)で表面化していた現代アイスランドにおける移民問題を扱った『厳寒の街』では、物語の出発点となる移民の子どもの遺体は地上で発見される。これらの遺体から過去と現在の 2 軸で物語が進行するとき、この遺体を掘り起こすという行為は単に発覚した事件の解決への糸口を見つけることだけではなく、過去を掘り起こすことをも意味する。今や男女平等が世界一達成された理想郷の様に見えるアイスランドでも、少し時間を遡れば不平等の蔓延する時代がすぐそこにあったこと、そして過去と現在の 2 軸の物語が密接に関わっていることから、現在と過去に大きな隔たりなど無く、

---

[7] Global Gender Gap Report 2023

Global Gender Gap Report とは世界経済フォーラムが 2006 年から作成を開始したジェンダー平等の達成度を経済、教育、健康、政治の各分野で評価したデータ。数値「0」が完全不平等を、数値「1」が完全平等を指し、数値が大きい程ジェンダー平等が達成されていることを表わす。2023 年度のアイスランドの数値は 0.912。

https://www.weforum.org/publications/global-gender-gap-report-2023/digest/

不断の努力がなければ過去に流される事をアーナルデュルは提示してみせる。現にアイスランドでは、制度や構造上は達成されたはずの男女平等が、日常レベル・家庭レベルでは改善されず、DV や性的虐待の割合が依然として高いままであるという「北欧のパラドックス」と呼ばれる現状が指摘されている [Sigrún Sif Jóelsdóttir, 2020]。

3. エイナル(Einar)

『湿地』の中でサガ的英雄の要素を持ち、遺伝という個人では到底対抗できないものに苦悩し、母親に性的暴行を加え、その結果自身の娘の命を奪う遺伝子疾患を自分に植え付けた父親を殺害するという、言わば悲劇の殺人者である。第 2 章で詳しく論ずるが、入植当時から個々人レベルの出生の記録が残っているという豊富なデータを持ち、さらには島という物理的に限られた空間であるが故に、アイスランドは生物学の現代的領域である遺伝学において病気の遺伝的傾向を研究する実験場として注目されてきた [スティーブン・A・ロイル, 2018]。実在の私企業をモデルにしたアイスランド遺伝子研究所に娘の死後からデータベース担当の研究員として務めるエイナルは、データ化された個人の遺伝子情報を、その気になればいつでも持ち出せてしまう立場にあった。戸籍上の両親が持ち合わせないはずの遺伝性の病に冒された娘の死から立ち直れなかったエイナルは、自身の立場を利用して関係者全てを騙し、研究プロジェクトを立ち上げ、母親を問い詰めて自身の出生の真実を知り、本当の父親＝ホルベルクを突き止める。ここで遺伝性の疾患の保因者という要素は、エイナルが殺人犯であることを突き止めるための主要な事件の鍵であると同時に、この物語の悲劇の中心に位置するものである。この点で、遺伝学は「激しく両義的な領域を占めている」 [Burke, 2012]。それ故に、エイナルが犯行に至る一連の流れはアイスランドが遺伝学の研究の理想的な実験場であるという要素なしには成り立たない。

エイナルは「父親のない子は父親に会いたがる」ものだと述べ、ホルベルクに直接会いに行き、衝動的にホルベルクを殺害する(インドリダソン 2012:360)。そこからホルベルクを見た時に頭に浮かび、エイナル自身の自宅の壁一面やホルベルクの殺害現場へ書き残した〈おれはあいつ〉(I am HIM)というメッセージはその後もエイナルを蝕み、エイナルが生涯抱えた出生の不安が爆発したものである。エイナルは娘を亡くすまでは概ね幸福な人生を歩んでいた。自身の出生の秘密も知らず、母親カートリンの「ホルベルクに(カートリンの)幸せな家族を壊させない」という強い意志から家族からは愛されて育ち、ラーラという女性と結婚する。しかし全く自身の出生に不安がなかった訳ではなく、カートリンに対して出生の事実を問い詰める際にはずっと違和感があったことを打ち明け、カートリンの家でエーレンデュル達が捜索したアルバムには、他の息子達とは全く異なった顔立ちの「醜いアヒルの子」であるエイナルの姿が残されている(インドリダソン 2012:337)。エイナルとホルベルクの容姿は似通っており、事実ウイドルの母親コルブルンの姉であるエーリンは、エイナルを見てホルベルクだと勘違いし、何度もおびえている。〈おれはあいつ〉というメッセージも、エイナル自身がホルベルクと対面し、自分の顔と酷似したホル

ベルクを見た際に浮かんだ言葉である。

そして戦士(one warrior)という意味の名前を持つエイナルの持つサガ的英雄の要素とは、サガの中でも頻出する「血讐」の完遂という点にある。血讐とは中世の北欧世界においては社会的に承認され、当時の法によって整備された紛争解決手段であり、殺人の場合に被害者の遺族が選び取れる自救行為、及び権利のひとつであった [坂西紀子, 2022]。サガでこの血讐が繰り返し取り上げられるのは、この自らの一族の名誉のために闘う血讐が英雄的な行為として見なされていたためである。また同時に、この「血讐」というモチーフは序章で述べた推理小説を歴とした文学の形態と見なす立場にあるとき、十分にセンセーショナルな要素となり得る。また人口約 38 万人(2023 年)のアイスランドの作家は、その読者の多くを海外に持つことになるが、サガに由来する「血讐」のモチーフは異教的雰囲気をキリスト教文化圏へ醸し出すことも可能である。エイナルは先述の通り間接的に彼自身の娘を亡くす原因となったホルベルクを見つけ出してその復讐を果たし、娘の死の復讐という点でホルベルクと同様にその標的であり、最後の保因者である自身もエーレンデュルの目の前でライフル銃を使って殺害する。これによりエイナルの「血讐」は完遂されたが、『湿地』は単なる血讐の物語ではない。エイナルは愛する娘の死の復讐だけではなく、ホルベルクの持つ遺伝性疾患に終止符を打つことも目的になっていったことが指摘できる。遺伝子性疾患の断絶という優生学的な思想にとりつかれたエイナルは物語の最終盤で「僕は火葬されたい」とエーレンデュルに述べる(インドリダソン 2012:356)。1000 年に全島がキリスト教に改宗して以来、アイスランドはキリスト教と共に歴史を歩んでいる。キリスト教世界において、火葬は最期の裁判後の復活の際に魂の器となる肉体の消失を意味する。ホルベルクに対して「俺たちで最後だ」と言い放つエイナルは娘の命を奪った遺伝子疾患の保因者の断絶を望み、復活、つまり世に保因者が再び現れることを嫌悪している。またサガや『エッダ』との共通点が多い『ベーオウルフ』[8]において、火葬は英雄であり勇敢な戦士でもあるベーオウルフの埋葬方法でもある。

エイナルは私的な目的のために秘匿されるべき個人の遺伝情報を取得するという倫理的な過ちを犯し、実の父親を撲殺するという凶行に及ぶが、その背景には自らの出生が長い間家族によって隠され、さらには自分の知らぬ間に娘の命を奪う疾患を、自らを経由して植え付けてしまったという悲劇がある。本書のあとがきでアーナルデュルが語るように、「殺人者が最悪の悪人であることはめったにない」。この『湿地』において最悪の悪人は

---

[8] 『ベーオウルフ』は 8 世紀にアングロ・サクソン語で書かれた、英雄ベーオウルフの一生を描いた作者不明の叙事詩。本文中で述べた通り『ベーオウルフ』の中に登場する人物やモチーフにはサガや『エッダ』との共通点が多く、その一例がウェーランド(Welande)というゲルマン人の伝承に登場する鍛冶屋であり、『エッダ』の『ヴェルンドの歌』や『シズレクのサガ』などに登場する鍛冶屋と同一人物でもある[谷口幸男, 1979]。
以下は『ベーオウルフ』におけるウェーランドへの言及の引用。
if the battle takes me, send back
this breast-webbing that Weland fashioned
and Hrethel gave me, to Load Hygelac (『Beowulf』452-454)

ホルベルクやエットリデであり、エイナルの動機にはむしろ同情の余地さえある。

4. エヴァ＝リンド(Eva=Lind)

エヴァ＝リンド(Eva=Lind)はエーレンデュルの娘である。彼女が 2 歳の時にエーレンデュルとパートナーは離婚し、エーレンデュルと再会したのは彼女が大きくなってからである。エーレンデュルには娘のエヴァ＝リンドと息子のシンドリ＝スナイルという 2 人の子供がいるが、どちらとも親子関係は悪く酷い状況の中で生きている。またエーレンデュルは 2 人の名前が元妻の好みで、外国の影響を受けたダブルネームであることを内心快く思っておらず、エヴァ＝リンドを呼ぶときはいつも「エヴァ」という呼称を使う。『湿地』においてはエヴァ＝リンドは麻薬中毒者で、その影響か歯は酷い状態で「痩せていて、目の下は黒ずみ、げっそりとやつれている」(インドリダソン 2012:23)。エヴァ＝リンド本人曰く「クソ一銭も金がない」時に父親であるエーレンデュルに金銭を無心し、ある日妊娠してからはエーレンデュルの家に頻繁に泊ることになる。またガルタバイユの花嫁の失踪というエーレンデュルが個人的に引き受けた事件は、エヴァ＝リンドの協力無ければ解決は無かったと言える(インドリダソン 2012:23)。物語の本筋であるホルベルク殺人事件とは無関係の立ち位置にいるものの、エーレンデュルから事件解決の進捗を聞く、母親から預かった行方不明の花嫁の捜索の依頼をエーレンデュルに伝える、物語の最後でエーレンデュルに自身が妊娠した子どもの名前を一緒に選んで欲しいと頼むなど、エーレンデュルという人間そのものを探る際に重要な人物である。同時にエーレンデュルの私的な空間の中に属するエヴァ＝リンドは、エーレンデュルが葛藤などの感情を吐露する相手でもあり、その最たる例はこの物語の題辞でもある「この話はすべてが広大なノルデユルミリのようなものだ」というエーレンデュルの台詞で、これはエヴァ＝リンドとの会話の中で登場するものである。

エヴァ＝リンドは先述の通り麻薬常習者であり、これは現代アイスランドにおいて社会問題のひとつとして広く認識されている。例えばアイスランドで何でも屋として生活する日本人の青年、御山慧を主人公にした入江亜季の漫画『北北西に曇と往け』でも、麻薬常習者などの世間のはぐれ者がたまり場として使用している家が登場するが、登場人物たちは薬物使用者に対して大きな反応を示さず、問題が常態化していることが伺える。またアイスランドの薬物をめぐる状況は年々悪化する傾向にあるという。アイスランド保健総局(Directorate Of Health)のオーラヴル･B･エイナルソン(Ólafur B. Einarsson)はアイスランドの薬物をめぐる「現在の状況は危機的である」と指摘した上で、現在薬物を摂取する年齢層が若年化している傾向にあること、特に鎮痛剤を大麻やアルコールと混ぜて服用する若者が増加していると述べ、若者の薬物使用について適切な指導を行うよう警告している[9]

[9] 一方で薬物の個人的使用を目的とした販売・所有を合法化しようという動きもある。1974 年に制定された薬物に関する法では、全ての違法薬物の取引・所持は処罰の対象であった [Elliott, 2021]。

[Ehrat, 2018]。

エーレンデュルの麻薬使用者に対する態度も冷静なものであり、エヴァ＝リンドが麻薬を使用している事を把握しているものの、咎めることはしても無理矢理麻薬から距離を取らせたり、激高したりすることは無い。しかし良心の保有者であり、まだ手の撃ちようがあるうちに親としての責務を果たせなかったと後悔するエーレンデュルは、娘がまさに親になろうとする瞬間から捜査の過程で明らかになったコルブルンやその娘のウイドルの姿とエヴァ＝リンドの姿を比較し、エヴァ＝リンドの良心を取り戻させようと苦心する。

エヴァ(Eva)は生命を表わし、 リンド(Lind)はセイヨウシナノキ＝リンデンを表わす名前で、総括すると生命の木とも捉えることのできる名前である。時に激高しながらも自らの良心をぶつけ、「しまいにはおれ自身、頭の中を勝手に飛び回る悪霊のようなものになってしまうんだ」とこぼすエーレンデュルにとって、エヴァ＝リンドはまさに良心を思い出し、悪に対して距離を置くための生命線である(インドリダソン 2012:253)。この物語には「家族」というテーマと関連のある木のモチーフが存在し、ガルタバイユの花嫁の結婚式場にある「願いの木」と、脈々と続く家系図を暗示した「家族の木」がそれである。「願いの木」はガルタバイユの結婚式場に飾られた、参加者が新郎新婦の幸福な結婚を願った紙を飾るオブジェクトである。同時に長い間父親に性的虐待を加えられた花嫁が、結婚式当日もそれを迫られて混乱し、結婚への祝福を書いた紙の中に紛れてその困惑を書いた紙を吊した木でもある。このガルタバイユの花嫁の話は、大きな邸宅に住み、豊かな暮らしを営む一見平和な家族が、その実は娘に性的虐待を加える父親、それを黙殺し家の平穏を保とうとする母親、そのストレスから麻薬に手を出した娘という歪な構成で成り立っていたことを暴き出すものであった。アーナルデュルはエーレンデュル・シリーズの中で家族を描くが、エーレンデュル自身の家族も含めてほとんどの家族に何らかの欠陥を抱えている。アーナルデュルの描く家族世界は、時に(それが善意や悪意のどちらにしろ)嘘や欺瞞に溢れ、衝突の起きる場であり、単に家族愛が自然と形成されるような生易しい場では決して無い。

2023 年までジェンダーギャップ指数 1 位の座を 14 年間保持するアイスランドだが、一方で法や制度ではカバーしきれない「隠れた欠陥」として DV など家庭内でのあらゆる暴力や男女の格差は未だに是正されていないことは国内でも問題視されている [Hagen, 2022]。またアイスランドの法的機関では男女平等の観念から家族的責任は両親で平等に分配されることを理想化する傾向にあり、身体・性的虐待が見逃されたり矮小化されたりすることも問題視されている [Sigrún Sif Jóelsdóttir, 2020]。エヴァ＝リンドも花嫁を発見した際、警察を呼ぶかというエーレンデュルの問いに、たとえ事実が明るみになり父親が裁かれることになっても「せいぜい執行猶予付きの三ヶ月の刑期ということになるのが関の山じゃない」と激高し、件の花嫁が結婚相手の元へ戻るのを手伝う。エヴァ＝リンドは確かに妊娠後も薬物を止められないという欠陥を抱えるが、エーレンデュルとの対話やコルブルンとウイドルの話を聞くうちに、エーレンデュルが取り戻させたいと切に願う良心

を少しずつ取り戻していくようになる(インドリダソン 2012:218)。物語の最後はエヴァ＝リンドとエーレンデュルが妊娠した子供に「ウイドル」という名前を付けるところで幕を閉じる。

5. マリオン・ブリーム(Marion Briem)

アーナルデュルの語る「殺人者が最悪の悪人であることはめったにない」とは裏を返せば、どんな善人でも動機と手段さえあれば殺人者になり得てしまうということである。繰り返すようだが良心の持ち手であるエーレンデュルは、ホルベルクの事件に際して動揺し、善悪の間に「距離など無い」ことを悟るが、彼が悪の側に流れることのないよう忠告したのが、マリオン・ブリーム(以下マリオン)という人物である。マリオンは『湿地』の中で最も謎が多い人物といえる。特に性別に関してはアーナルデュルも(他言語の翻訳にあたり、いくつかの言語では不可能であったが)このキャラクターの性別を曖昧にし、このキャラクターに性別という属性を与えないことを念頭に置いていた [Jóhannsdóttir, 2014]。エーレンデュルの同僚シグリュデュル＝オーリも「待てよ、マリオン？マリオン？なんなんだ、この名前は？女なのか？男なのか？」と困惑し、「おれもときどき分からなくなる」とマリオンを自身が新米捜査官だった頃の指導官に持つエーレンデュルでさえマリオンを捉え切れていない様子が描写されている(インドリダソン 2012:229)。物語では、マリオンが直接捜査に関わることは無い。マリオンは自身の持つ捜査経験や過去の知識から導き出される事件解決の手がかりをエーレンデュルに与え、自らの経験からエーレンデュルの心情を予測し忠告を与えるメンター的存在として機能している。マリオンについてエーレンデュルは以下のように描写している。

> マリオンは、いまのエーレンデュル同様、管理職につくことなく、一生現場捜査官として働いた。(中略)年を取ってからも記憶力は後退せず、鮮明だった。目と耳で集めた情報は脳の中に整理され、記憶され、保存され、必要とあらば、いつでもすぐ取り出すことができた。マリオンはどんな古い事件のデータでも、細部にわたって思い出すことができる。アイスランドの犯罪に関することなら、どんなことでも知っている情報の宝庫。決断力は高く、思考は合理的だった。(インドリダソン 2012:166-167)

マリオンは多くの知識を持つために、アイスランド神話における知識の神としての側面を持つオーディンの要素があり、未来を予言し忠告を神や人間などに与える『エッダ』の冒頭の『巫女の予言』に登場する巫女のような要素も併せ持つ。マリオンが性別を与えられていない背景には、超人的な記憶力と知識量を有するマリオンが、どこまでも人間らしいエーレンデュルと対比され、神話的な要素をもつキャラクターであるという考察ができる。しかし人間離れした知識量を有し、神話的な要素を持つマリオンだが、それそのものを具

現化した存在やそれを暗示した存在ではなく、あくまでこれらの要素を持つただの人間である。マリオンは登場回数こそ少ないものの、憂鬱な表情を浮かべるエーレンデュルを自分と同類と認めて同情を寄せ、元指導官としてエーレンデュルの行く末を案じ、現場捜査官であったころにはエーレンデュルと意見が対立し、お互い口をきかない期間があったなど人間らしさも垣間見える。

ここまで、『湿地』における様々な人間描写を検討してきた。冒頭でも述べたように、この物語では発端となる事件の解決という本筋の周辺に、歴史学を専攻し、ジャーナリストとしての経験があるアーナルデュルのアイスランドの歴史的事実、歴史的な書物、現代の課題といった要素が重層的に散りばめられている。そしてこれらが全て多かれ少なかれ、「エイナルは何故ホルベルクを殺したのか」という事件解決の鍵となり、さらに何故人間は人間を殺すのか、それに至る動機とは何かというアーナルデュルの持つ人間そのものへの興味と洞察を反映したものでもある。巧妙なトリック、過激で過度にドラマティックな描写を省き、どこまでも人間の本質を探ることを核とした本作は、まさに人間性を追求したミステリー小説の好例といえるだろう[10]。

---

[10] 『湿地』を映画するにあたって、過激でドラマティックな描写の少ないアーナルデュルの小説には多くの脚色を付ける必要があったのだろう。その例が、エットリデの脱獄とエットリデによるルーナルの殺害、そしてその追走劇である。またエヴァ＝リンドを追いかけてやってきたならず者を追い返すエーレンデュルのシーンもそれにあたる。ここでは映画化にあたり小説の地味な捜査活動に加えて、画面が盛り上がるアクションシーンが盛り込む必要があったことが推測できる一方で、コルブルンという母親の話や、アイスランド遺伝子研究所の研究者、臓器コレクションの紹介はエイナル個人に集約され、エイナルが優生思想的な「負の遺産(＝劇中では遺伝性疾患のこと)」に終止符を打つという独善的な使命感を持つことが強調されている。しかし英語版や映画版での題名が“Jar City”であることから、「ガラスの容器置き場」への関心は高く、(グロテスクな)舞台装置としての「ガラス容器置き場」に対しては、この場を細かく注視するエーレンデュルの姿が映されている。

第２章　島の文学としての『湿地』

本章では『湿地』をアイスランドという「島[11]」で書かれた小説であるという観点から、『湿地』にみられる島嶼性に関して考察する。島嶼性(Insularity)とは島であるが故に課せられる様々な制約のことを指し、これは程度の差こそあれ世界の島に共通するものである。

スティーブン･A･ロイルは『島の地理学　小さな島々の島嶼性』の中で島を「水で囲まれた陸地と定義するほかない」とし、島が特別視される存在である担保はその隔絶性と境界の明瞭さにあると指摘する(ロイル 2018:13)。また島の魅力は往々にして「鮮やかな」言葉で飾られることで、「島はパラダイスであり、島はロマンティックである」という、必ずしも現実の生活とは結びつかない島の姿、則ち「夢の島」を形成し、このイメージは形成されると共に作家や芸術家等によって利用されてきた(ロイス 2018:26)。彼は「島はいつもパラダイスとは限らないが、「島の地理学的魅力」は疑いなく存在する」と述べた上で「島の現実がしばしば「夢の島」の語りからはほど遠いこと」を指摘している(ロイル 2018:34,6)。

同様に 1871 年、1873 年にアイスランドへ訪れ、その旅行記である『アイスランドへの旅』(*Journals of Travel in Iceland*)を記したウィリアム･モリス(*William Morris*)は、当時イギリスで興隆していたゴシック･リバイバル(*Gothic Revival*)における中世への賛美の念から、ユートピア的社会主義の理想をアイスランドに求めていた。この旅では、アイスランドの自然だけではなく、そこに暮らすアイスランド人の生活やシンプルで威厳のある芸術作品(the simple and dignified art)への感動が記述されているものの、当時の「現実の島」としてのアイスランドの姿――則ち貧困と絶え間ない窮乏に耐えるアイスランドの人々の生活を目の当たりにし、動揺したという記述もある。ウィリアム･モリスは「ロマンティックな島」と「現実の島」のギャップを目の当たりにした人物であった。

ここでは観光的資源としてアイスランドが何を提供しているのか、他国の文学作品においてアイスランドという島がどのような装置として機能しているかを検討する。次に『湿地』において描かれる現実的なアイスランドの姿を検討する。ここでは『湿地』のなかで島嶼性の作用が見られるアイスランド遺伝子研究所とノルデユルミリのアパートを取り上げ、これらの関連する歴史的な事実を取り上げながら考察する。ここで重要なのは「夢の島」の語りから離れた「実験場としての島」と「チェスの駒としての島」という現実の島の姿である。

1.　「夢の島」

前述の通り「夢の島」という語りは、語られると共にそのイメージを多くの作家や芸術家が利用してきた。アイスランドにおいては、2008 年の金融危機をうけて観光立国への道を歩む過程で非日常的な「夢の島」の語りは、観光イメージとして前面に打ち出されるよ

[11] 島はアイスランド語で eyja(単語),ey(主に複合語)。アイスランドの観光地の１つエイヤフィヤトラヨークトル(Eyjafjallajökull)は「島の山の氷河」を意味する。

うになった。アイスランドの主要な観光サイトであり、著者自身もアイスランド旅行の際に使用した Guide to Iceland では、他の北欧諸国とは異なった「ユニークな体験」を提供する国としてアイスランドを紹介する。このサイトではアイスランドの観光情報の紹介のひとつとして『ロマンティック・アイスランド』というページを見つけることができる。ここでは都会の喧噪を離れ、時間を忘れて大切な人と神秘的で雄大な自然を見つめる旅の提案がされ、同時に「ロマンスの島」として結婚式を挙げることもできるという紹介もある。

島という場所は作家にとって「登場人物が通常の社会的拘束から自由なところ」として見なされ、「より「原始的な」、すなわち社会的拘束の弱い側面」として描写されてきた。その例にもれず、アイスランドという島を非日常的な空間、大陸の論理を適用しなくとも良い空間として描写した作品例として、ヴィクトル・ユゴー(Victor Hugo)の処女作である『アイスランドのハン』(1823 原題：“Han d'Islande” 邦訳：『氷島奇譚』)を挙げる。この物語の舞台は1699年のノルウェーだが、その中にアイスランド出身のハンという男が登場する。ここで引用するハンに関する容姿の描写では、ハンが野蛮な男であるという印象が強調され、赤毛の髪や髭を持つがっしりした男であるという描写からは、ノルウェー、アイスランドの探検家で、ヨーロッパ人で初めてグリーンランドに入植した赤毛のエイリーク(950 頃～1003 年頃)を連想させる。

> もう一人の男は背が低く、太ってがっしりした男で、頭から足先までを、まだ乾いていない血で汚れたあらゆる動物の皮に身を包み、ギル・シュタットの死体の足下に立っていた。ギル・シュタットの死体は、若い娘と船長の死体と共に、奥の方にあった。3 人の無言の目撃者たちは、半ば光の中に埋もれていたが、恐怖で逃げ出すこともせず、2 人の男の会話を見ることができた唯一の存在だった。
> 光によって鮮明に浮かび上がった小柄な男の顔は極めて野蛮なものであった。赤毛の顎髭はもじゃもじゃで、額はヘラジカの皮でできた帽子で隠れていたが、同じ赤毛の髪が生えているように見えた。口は大きく、唇は厚く、歯は白くて鋭いすきっ歯で、鼻は鷲のくちばしのように曲がっていた。灰色のぎょろぎょろと動く灰青の目は、スピアグドリーを斜めに一瞥している。まるで虎の獰猛さは猿の狡猾によってしか和らぐものでないかのように。
> de l'autre, un homme petit, épais et trapu, vêtu de la tête aux pieds de peaux de toutes sortes d'animaux encore teintes, d'un sang desséché, et debout au pied du cadavre de Gill Stadt, qui, avec ceux de la jeune fille et du capitaine, occupait le fond de la scène. Ces trois muets témoins, ensevelis dans une sorte de pénombre, étaient les seuls qui pussent voir, sans fuir d'épouvante, les deux vivants dont l'entretien commençait.
> Les traits du petit homme, que la lumière faisait vivement ressortir, avaient quelque

chose d'extraordinairement sauvage. Sa barbe était rousse et touffue, et son front, caché sous un bonnet de peau d'élan, paraissait hérissé de cheveux de même couleur ; sa bouche était large, ses lèvres épaisses, ses dents blanches, aiguës et séparées ; son nez, recourbé comme le bec de l'aigle ; et son œil gris bleu, extrêmement mobile, lançait sur Spiagudry un regard oblique, où la férocité du tigre n'était tempérée que par la malice du singe.(Hugo 1823:49)

しかしアイスランドが物語の舞台として登場することはなく、あくまでハンという野獣のような鋭い爪を持つ怪人の出身地であるという記述に留まり、ここでは残虐で「悪魔」のような怪人という現実ではありえない現象の理由付けとしてアイスランドという島の出身であるということが機能している事がうかがえる。アイスランドという、大陸の人間社会から物理的に隔絶され、異様に空が暗く、火山活動の活発な地への探検やその記録から、「来世の世界は、世界の境界であるこの島(＝アイスランド)にある」という伝聞が、ヨーロッパに伝わっていた。それ故その地に生まれた者を「悪魔」として描写する手法は12世紀のサクソ・グラマティス(Saxo Grammaticus)による『デンマーク人の事績(*Gesta Danorum*)』から立ち上がり、16 世紀のオラウス・マグヌスによる(Olaus Magnus)北欧の百科事典『北方民族史(*Historia de gentibus Septentrionalibus*)』で確立されたもので、ユゴーの『アイスランドのハン』はその手法を使った最後の文学とも言われている。またユゴーはこの物語の執筆にあたってこのような伝聞だけではなく、ユゴー個人がエッダから得た知見を活用した描写もしばしばみられるものの、隔絶された島に神秘や地獄などの浮世離れした属性を付与しているという点で「夢の島」の語りが如実に表れた文学作品であると言える [Brugnoli, 1996]。

2. 「実験場の島」

『湿地』においてこの島嶼性が大きく作用しているものの 1 つが「アイスランド遺伝子研究所」という実在の民間企業をモデルにした研究所である。ここではアイスランドが「実験場」として見られている現実を、エーレンデュルと遺伝子研究所の会社の理事の会話から考察する。この『湿地』ではエーレンデュルのような一般のアイスランド人が持つ遺伝子研究への意見やエイナルの起こした事件への見解と、病理学者や大学教授、研究者側が持つこれらの意見、見解の差異が描写されている。エーレンデュルは、進歩や大義のために個人の苦痛を踏みにじることを厭わない態度を取る、ホルベルクの解剖を担当した病理学者、アイスランド大学医学部主任教授、個人の臓器コレクションを所有する高名な医学者、アイスランド遺伝子研究所の理事の各人物に対して臓器の蒐集の話や、時には「ガラスの容器置き場」の話題を出す。ここで興味深いのは、社会的な立場が相対的に上である人物、例えば高名な医学者やアイスランド遺伝子研究所の理事の方が、個人の苦痛を踏みにじっているという罪悪感が薄い、またはその認識がないなど、エーレンデュルと

の対立が際立っている点である。

またここでは蒐集による「世界」の構築に対するエーレンデュルの嫌悪感、不信感についても指摘する。この物語において「世界」を作り上げた人物や機関、ホルベルク、グレータル、エイダール(＝ウイドルの脳を保有していた医学者)、アイスランド遺伝子研究所はそれぞれポルノ、ホルベルクの犯行現場、人体の臓器の一部、アイスランド人の遺伝子情報を収集しており、それらを見つめ、観察し、時には研究するという意味でその世界の神のような支配的な位置に立っている。その視点に立つ時に発生する暴力性、例えば人間の臓器の収集において許可を得ずにそれを摘出するといった行為の人間的倫理の欠如に、エーレンデュルは憤るのである。以下はアイスランド遺伝子研究所の理事であるカリタスとエーレンデュルの最後の会話である。

> 「そして、遺伝子研究所はあらゆる秘密を手にするわけですね。古い家族の秘密を。悲劇や苦しみや死がこぎれいにコンピュータの中に整理される。家族の歴史や個々の人間の宿命も。あなたのも私のも。あなたたちはすべての秘密を保管し、気の向いたときに取り出すことができる。全国民のための“ガラスの容器置き場”というわけだ」
> 「お話の意味が分かりませんが？」カリタスが言った。「“ガラスの容器置き場”とは？」
> 「もちろん、わからないでしょうな」(アーナルデュル 2012:348)

エーレンデュルは個人情報が収集され、保管されることそのものに対して問題意識を持つのとは対照的に、アイスランド遺伝子研究所の所長はデータの漏洩や遺伝学上の問題提起を語るという点で、この 2 人の会話は成立していない。カリタスが淡々とエイナルがデータを持ち出した方法を解説し、エイナルが情報委員会を騙したことを非難するのに対してエーレンデュルが返す沈黙は、アイスランド大学医学部教授の言うことには「医学上の偉業を理解」したいと思わない彼なりの抵抗と言える(インドリダソン 2012:271)。またここでは個人における善と集団における善の間の齟齬や軋轢があることも読みとれる。エーレンデュルにとって、個人の秘密を収集し、その秘密の収集によって支配的な地位に立つことは耐えがたい個人の尊厳への冒涜であった。一方でカリタスはアイスランド国民全体、ひいては世界中の人間という全体にとって、自らの研究は進歩のための崇高な善行であった。この 2 人は個人の尊厳と集団の利益という物差しでアイスランドの遺伝子研究を語っているために、前提となる価値観が大きく異なっているために、相手の語る内容に理解ができず、結果的には沈黙が生まれてしまったのである。

マリオンも、アイスランドの犯罪に関する情報の収集し、その知識を、カリタスをはじめとするアイスランド遺伝子研究所の関係者と同様にいつでも取り出せる、ある種支配的な立場にいる。しかしマリオンが否定的な見解で語られないのは、マリオンがエーレンデ

ュルのメンターであり、エーレンデュル同様良心の保持者であるという点が大きいだろう。

また第1章で述べた通りエーレンデュルは最新のもの、とりわけコンピュータなどの最新機器に対する理解は全くという程ない。つまり、コンピュータなどを介してインターネットを使えば気軽に世界中の人々と交流できるという現状を自分の感覚としては理解しておらず、エーレンデュルにとって実感を以て把握できる世界はアイスランドの形でしかない。それ故、アイスランド遺伝子研究所の業績が「全国民のため」であることは理解出来ても、全世界の、あるいは全世界共通の医学・科学の進歩ためのものになる可能性を秘めていることにまで思考が及んでいるかは定かではない。世界への接続性が薄く、思い浮かべる世界の形とアイスランド全体が大きく重なるエーレンデュルにとって、この思考に行き着いた可能性は低いだろう。

作中のアイスランド遺伝子研究所のモデルとなるのはデコード・ジェノミクス社(deCODE genetics)であり、実際に IHD(アイスランド・ヘルスケア・データベース)と呼ばれる、「アイスランド全体の医療システムから情報を集めた集中型データベース」の構築を提案し、アイスランド議会は1998年に疾患記録の収集を許可した健康部門データベース法を、2000 年に遺伝情報の収集を許可したバイオバンク法を定めてこれを承認している。『湿地』でもこの過程やアイスランド人の遺伝子にまつわる言説について触れられている。

> エーレンデュルは遺伝子研究所のことを思った。最近、アイスランド遺伝子研究所は全国民の健康状態を把握するため、死者も生存者も、すべてのアイスランド人の疾病記録をデータベースに収める作業に着手した。(中略)つまり、全アイスランド人の遺伝子を系統立てて明白にしようというものだ。もっとも重要な目的は、病気がどのように遺伝するかを明らかにすること。DNA技術を使って遺伝子を調べ、可能な治療法を探すことにある。アイスランドは単一民族で、外からの影響が少ない。そのことが遺伝子研究に理想的な環境になっていると言われている。(アーナルデュル 2012:336)

ボストン大学医学部及び公衆衛生大学院の医学博士ジョージ・J・アナス(George J. Annis)博士は「アイスランドには、第一次世界大戦までさかのぼる全国民の医療記録と、さらにさかのぼる詳細な系図情報」が存在することを指摘し、またアイスランドの人口が少なく、実りのわずかな土地であるが故に直接的な侵略から逃れてきた歴史を持つことから、「長い間隔離され、同質性が保たれており、病気に関連する遺伝子を探すには理想的な場所だと考えられてきた」と説明する。この考えはジャーナリストによって強化され、同氏によればジャーナリストたちは、アイスランドは「地球上で最も均質な人口(the most homogenous population on earth)」を有する「近親交配の島であり、幸福な遺伝子の狩り場でもある(island so inbred that it is a happy genetic hunting ground)」といった評価を軽率に下してきたという [ANNAS, 2000]。前述の「夢の島」の語りは観光や物語のだけのみ

で有効活用されるものではなく、主に企業によってアイスランドは遺伝子研究にとって「夢の島」であるという語りがされていることが分かる。

同様に、アイスランド人が「文化的にも民族的にも同質であり、長い歴史を持ち、ヴァイキングやアイルランドの入植者までその血筋をさかのぼることができるという考えは 19 世紀の民族誌的なテキストに起源を持ち、公的な言説として見なされるようになった」という指摘もある [Burke, 2012]。つまり、デコード・ジェノミクス社は遺伝子研究を正当化し、アイスランドという小国が持つその隔絶性から生じる利益をアピールするためにこの言説を利用したということだ。結果的に、デコード・ジェノミクス社の行った研究は、かえって「アイスランド人は文化的にも民族的にも同質である」といった言説を否定するものになった。

また事実としてアイスランドには最初の定住者とその後裔者たちの家系を詳細に記録した『植民の書』がある。『湿地』でも連綿と続く家族の系図が残されてきたことはエーレンデュルを通して語られるが、アイスランド人の口から語られる言葉であるという点で、言説を形成するに至った軽率な評価というよりは自国の矮小性や小国性を、諦観を伴って俯瞰した評価という印象の強い台詞である。

> さらに続けて母親と娘、父親と息子、母親と息子、望まれなかった子ども、この小さな国アイスランドで死んだ子どものことを考えた。遠くさかのぼれば、だれもがどこかで血のつながりのある、だれもが姻戚関係のあるこの小さな国で。(インドリダソン 2012:295)

ハーバード大学医学部で脳神経学の教授職にあったアイスランド人で、デコード・ジェノミクス社を設立したカウリ・ステーファウンソン(Kári Stefánsson)医学博士と、そこに所属するジェフェリー・R・ガルチャー(Jeffery R. Gulcher)博士は自身の論文の中で、構築されたデータベースの医学的な功績を認めつつ、「科学倫理、プライバシーの保護、商業的利益による科学の堕落など」の個人情報に対する倫理的な課題が数多く浮上したことも認めている。

科学倫理の観点から浮上した問題としては、遺伝子研究に関連する同意の問題が挙げられている。IHD のデータは、社会規範に従って健康情報を利用するということに対する社会全体の同意を指す「推定同意(presumed consent)[12]」という曖昧な概念のもとで収集される。この推定同意は、個人が自己で同意するか否かを判断する権利であり、科学者から被験者個人の自律性を遵守する手段としても有効なインフォームド・コンセントに至らず、

[12] Cambridge Dictionary によれば「推定同意(presumed consent)」とは、本人が「許可していない」と言明しない限り、当人は何かを許可したと見なす考え方のことを指す。本稿で述べた「推定同意」は、引用元の論文が定義したものに準ずる。いくつかの国では臓器提供(＝当人の死後に、その体の一部を使用することを許可すること)などにこの推定同意が用いられている。

時に対立するという問題が挙げられ、生命倫理の観点からも指摘されている。また遺伝学に関連する倫理的な問題としては、「優生思想」というキーワードも浮上する。

マンチェスター・メトロポリタン大学のルーシー・バーク(Lucy Burke)はレナード・デイヴィス(Lennard Davis)の「小説とは正常な身体と逸脱した身体との間に構造的な区別を埋め込む一連の歴史的、経済的、知的変容の想像的な表現を出現させ、障害の社会的関係を築き上げるもの」であるという議論を踏襲しつつ、「19 世紀の発展が優生学の分野と密接に結びついている文化形式を挙げるならば、それは探偵小説である」と述べる。社会的な秩序を乱す殺人者、犯罪者に優生思想、人種等において「逸脱」した属性を付与させ、「正常な」探偵や警察がそれの犯人になんらかの方法で罰を与えて社会的秩序を回復するという構造は、逸脱性と正常性を社会の中で型作るものであり、「逸脱」した存在を「正常」な存在が法や秩序によって封じ込めるということを暗に意味する [Burke, 2012]。一方で『湿地』を含めた、福祉国家批判という特色を持ち合わせるノルディック・ノワールの作品群はこのような単純な善悪二元論的な枠組みを否定し、むしろ社会の中で形成された「逸脱」と「正常」の境界の曖昧さを突きつける。従来は法と正義を司り、「正常」であるはずの捜査官エーレンデュルは多くの欠陥を抱えた人物であり、従来社会的秩序を乱す「逸脱」した殺人者エイナルには同情してしかるべき理由がある。ここに明確な善悪の軸はなく、悲劇の殺人者であるエイナルは、加害者であると同時に被害者であり、保因者として虚構の幸福な家族世界を攪乱するものであり、単純な善悪二元論に還元できる存在ではない。同時にエイナルの自殺を見届け、彼の代わりにウイドルの脳をあるべき場所へ戻して再葬し、エイナルのホルベルクへの犯行は自己防衛上の事故だったと彼の母親に伝えるエーレンデュルは、罰を与える裁定者ではなく、この物語の結末を見届けて語る観測者でしかない。このような「過去から連綿と続く同質の遺伝子」を持つという言説の存在、そのような国民神話的アイデンティティを「逸脱」した保因者が自力で暴くことが可能な人口規模であること、家族の物語から遺伝子研究全体の是非や功罪を問うという物語の根幹において、その大前提として隔絶性や矮小性が作用していることは紛れもない事実である。

プライバシーの保護という観点では、収集された個人の健康情報の保護が本当に信頼できるものか否かという問題が指摘されている。IHD の記録はアイスランドの個人情報保護法(Privacy Law of Iceland)に基づくデータ保護委員会(Date Protection Commission of Iceland)によって暗号化され、厳重に保管されているが、物語の中でエイナルが行ったのはこの個人情報を保護するはずのデータ委員会を、私的な目的のために騙して暗号化された個人情報を入手して解読し犯行に及ぶという、遺伝子研究におけるプライバシー保護に関わる同意や信頼という概念の根底を揺るがすものであった。

アイスランドでは IHD の構築にあたって、科学や医学の進歩と個人情報の保護をめぐる議論は活発化していたが、2000 年 4 月にギャラップ社が行った世論調査では、この課題に関心のある人々の約 90%が健康部門データベース法を支持していたという。 [EFFREY R.

GULCHER, 2000]。しかし物語上では、アイスランド遺伝子研究所の理事カリタスは「ときどき、国民全体がわれわれに反対しているように見える」と懸念を示す。事実、2000 年 5 月までに 18000 人以上の国民(当時の成人人口の 10%以上)が研究計画から離脱したという報告もあり、「科学と医学の倫理を求めるアイスランド人協会」というデコード・ジェノミクス社のプロジェクトに反対するための協会も設立されている [ANNAS, 2000]。

物語上において、アイスランドを実験場にした遺伝子研究に対して倫理的な問いかけを投げかけるのが、1 章で述べた通り良心の保持者であるエーレンデュルなのである。彼はウイドルの臓器が母親コルブルンの許可無く持ち出され、研究され、コレクションされていること、そして「医学上の偉業」の名の下に「家族の歴史や個々の人間の宿命」が収集され、管理されることを同一線上のものと考え、それに憤る。「死んだとき、自分の体の一部がホルマリン漬けになってガラスの容器の中に納められ、研究室に保管されるのだけはごめんだ」と「ガラスの容器置き場」からアイスランド遺伝子研究所まで続く、「医学上の偉業」のような大義のために個人が犠牲になるような行為を否定する。またエーレンデュルはウイドルの脳を高名な医学者から持ち出し、それを「あるべき場所」としてウイドルの墓に返すことでこの言葉を行動で示しさえするこれらのエーレンデュルの言動は、ハルドウル・ラクスネスが描いた自主独立の主人公像を受け継ぐ、尊厳ある個人の生き方を遵守する 1 人の人間として推定同意を否定するものであり、現実のアイスランドで行われていた遺伝子研究の倫理的な課題に関する議論を反映したものでもある(インドリダソン 2012:309)。

3. 「チェスの駒としての島」

物語の本筋には大きく関連しないものの、ノルデユルミリのアパートの背景事情には島の微力さを表わした「チェスの駒としての島」という観念が関連する。ノルデユルミリのアパートは第二次世界大戦前後の人口の変化により、レイキャヴィク北部の湿地を開発して居住地とし、主に低所得者層に向けて売り出したことが背景にある。ここではアイスランドという小さな国が、当時の人口の約半分にもなる人数のアメリカ軍を受け入れるにあたって街や国全体は大きく変化せざるを得なかったこと、そしてその大きな変化を目のあたりにした世代でもあるエーレンデュルが「外国」を思わせるものに敏感になっていること、変化を警戒していることを論ずる。

アイスランドは 1918 年にデンマークとの同君連合下で主権を認められて以降、対外的における永世中立を宣言し、他の北欧諸国とは異なる独自の道を歩み始めた。しかし第二次世界大戦下でドイツがデンマーク、ノルウェーを攻撃するとイギリスは警告を送った後にアイスランドを占領する。翌年になるとアイスランド政府はイギリス軍に代わってアメリカ軍が駐留する旨の条約に調印し、アメリカ軍の駐留が開始され、その人数はアイスランドの人口の約半数に及んだ。1944 年にアイスランドは独立を果たしたが、1941 年に戦争終結後に撤退するはずだったアメリカ軍は駐留を続け、アメリカは 99 年期限で軍隊基地を

貸与する旨の打診をしたがアイスランドはこれを拒否し、1946 年には 1 年半以内のアメリカ軍の撤退とドイツの占領業務に携わる間のみケプラヴィーク空港の使用を認める妥協案が成立し、1947 年から 1951 年の間は外国軍の駐留から免れることとなった。しかし冷戦の激化に伴って1951年にはアメリカとアイスランドの間で、アイスランドが軍隊基地の貸与とそれに関する支援を行う代わりに、アメリカがアイスランドの軍事的防衛の役割を果たすといった防衛協定が結ばれて再びアメリカ軍が駐留し、アメリカ軍の駐留は固定化され、それは 2006 年まで続いた。また 1949 年には自国の非武装と平時においては外国軍の駐留を認めないことを条件に NATO に加盟している [大島美穂, 2022]。一度国際関係の枠組みの中で明確な位置を与えられてしまえば、そこから離脱するのは不可能である。2001 年時点でのアイスランドを中心に扱う本論で詳細な議論は行わないが、2006 年に完全撤退したことで生まれたアイスランドの軍事の空白さは、北極圏での競争の激化に伴って軍事力の欠如と誤解される危険性があるとし、アメリカ軍の撤退は「短絡的」であったという旨のスピーチを、アイスランドのビョルン・ビャルナソン(Björn Bjarnason)法相がスウェーデン大西洋評議会に向けて発表している [Marshall, 2015]。

ここで重要なのが、アイスランドという小国が外部の軍事的、政治的な圧力に弱く、そして世界大戦や特に冷戦といった世界の状況の中で米ソの間に位置する孤島という戦略的要地となったことで、中立を保てなくなったアイスランドは2006年までアメリカ軍の駐留を許さねばならなかったということだ。島が「その戦略的な位置や、単に競争相手にその場所を使わせないといった理由で、島は外部の勢力による争いの対象になっている」[スティーブン・A・ロイル, 2018]状況を指す「チェスの駒としての島」という言葉は、この第二次世界大戦中に連合軍に占領され、冷戦下において NATO の軍事システム網の中に明確に位置づけられたアイスランドの状況にも適用する事が可能である。アーナルデュルの『緑衣の女』では駐留アメリカ軍というキーワードが、『湖の男』では冷戦というキーワードが物語に大きく影響し、後者では当時アイスランドはアメリカとソ連の両陣営にとって魅力的な戦略的要地であったことが明らかになる。しかしこのような政治的影響力以上に物語にとって重要なのは、「超大国の軍隊(＝アメリカ)がアイスランドを占領するのは、アイスランドの独立と中立だけでなく、国民文化、価値観、アイデンティティに対する非常に甚大な脅威である」という点である [Neijmann, 2017]。小さい島にとっては、社会に良い意味でも悪い意味でも影響を与え、安寧を揺るがす他者というのは大きな問題になる。アイスランドにおいてアメリカ軍の駐留は雇用の増加などの好影響を与え、駐留軍と国民の間に大きな衝突はなかったものの、アメリカの英語によるラジオ放送などによるアイスランド語への文化的脅威は国内で懸念されてきた。無論、今日では「国民食」として親しまれるホットドッグやコーヒーも駐留の影響を受けたものである。

『湿地』では物語上の主要なキーワードとして第二次世界大戦、冷戦が浮上するわけでは無いが、エーレンデュルの「外国」を思わせるものへの態度から自国の文化を脅かす外的要因への憂慮が見受けられる。言語という点では、第 1 章で述べたエヴァ＝リンドやシ

ンドリ＝スナイルといった外国の影響を受けたダブルネームを嫌悪し、エヴァの話す英語混じりのアイスランド語に対して、「まともな話し方はできないのか」と腹を立てる描写からその片鱗を見ることができる(インドリダソン 2012:25)。アイスランド語というアイスランド独自の言語には、「アイスランドではアイスランド語を話すべきである」という語りが存在する。この背景にはデンマークからの独立を目指す時期と同時期に盛んであった、アイスランド語で文学を執筆するという文芸運動がある。

1910 年頃から 1930 年頃にかけて、デンマークのコペンハーゲン大学への留学や北米大陸への移住の流れの中でアイスランドでは「ヨーロッパ文学」という枠組みで評価されるために、あえて自国を離れ、自国語以外の言語で文学を発表する試みがあった。人口の少ない自国から離れ、広く世界に認められようというこの試みは達成され、この時期にアイスランド文学は史上初めてヨーロッパの中で評価されるようになる。しかしヨーロッパと接続が可能になったことで、逆説的にヨーロッパ、ひいては世界の文学における潮流の影響を受けることとなり、既存の文学からの脱却の試みがされるようになる。ここで1930年頃から、アイスランド語で既存の国民主義的な文学ではない、個人主義的かつ同時代的な現代文学を世界に発信する文芸運動が展開されることとなった。1955 年に『独立の民』(原題：Sjálfsætt fólk ， 英題：Independent People)でノーベル文学賞を受賞したハルドウル・ラクスネス(Halldór Laxness)を始め、アイスランド国内で現代文学への改革を提唱したソウルベルグル・ソウンザルソン(Pórbergur Porðarson)等がこれに該当する [清水誠, 2009]。特にアイスランド語で描かれた文学がノーベル賞作家を受賞し、「世界文学」として認められたという経験は、アイスランドという国と密接に結びついた言語アイデンティティを刺激するものであり、「アイスランド人はアイスランド語を話すべきである」という語りを補強するものであったであろう。世界初の民選で選出された女性国家元首のヴィグディス・フィンボガドゥティル元大統領(Vigdís Finnbogadóttir)は、「言語は知識の鍵である。言語が失われれば、先祖からの重要な知識も失われる。私たちの言葉は私たちそのものだ」と述べ、アイスランド人にとって言語というものがアイデンティティの中核にあることを示唆する発言をしている[羽田理恵子, 2019]。

古ノルド語というかつてスカンディナビア一帯で話されていた言語を祖先に持ち、孤島であるが故に、他のヨーロッパ言語の影響を受けて簡素化し、大きな言語の変化を遂げた他の北欧諸国の言語とは異なり、昔ながらの言語体系が残されたアイスランドにとって、アイスランド語は自国の歴史そのものと言える。ここでは、隔絶性の資源としての言語がある。アイスランド語は、古英語を扱う教科書で扱われる、サガや北欧神話の文献を読むために研究者の第 2 言語に選択されるなど、他国からも過去と接続するための言語としてその価値を認められている。また J・R・R トールキンによって『指輪物語』に登場するエルフの話す言語の参考としても、アイスランド語は活用されていた。

その一方で、アイスランドの言語の純粋さを語るこのアイスランド語の言説は、今日ではその信憑性の担保が危ぶまれている現状がある。アイスランドの政府機関である言語計

画部(Language Planning Department)のアリ・ポール・クリスティンソン(Ari Páll Kristinsson)は「アイスランド語の伝統的な言語文化や、言語イデオロギーの礎になっているのは文法的、正書法的、語彙的な純粋主義であり、一般市民はアイスランド語の新しい単語や造語、正書法の標準化、適切な言語使用に対してのアドバイスに関して、概ねその計画を支持しているが、適切な言語使用に関しては、しばしば実務的な言語を選択してしまう傾向にある」と述べる。特定の領域、例えば観光業、国際企業、銀行、学界や大学などのアイスランドの活動や事業が英語圏の一部となることを望む分野において、アイスランド語の使用を促進し、アイスランド語の社会的地位や権限を高めようとする計画は歓迎されていないという。アイスランド言語計画部は教育現場でのアイスランド語の使用の促進、新規居住者へのアイスランド語教育、外国語のアイスランド語への翻訳・造語など、言語保存のための計画を行っているが、Microsoft 社の Windows がアイスランド語に対応しないことや、特に若い世代がソーシャルメディアを使用する際にアイスランド語をあえて使用しないという現状を懸念している [Kristinsson, 2018]。近年ではアイスランドへの移民の流入にいる影響で外国訛りのアイスランド語も登場し、アイスランド国営放送の RÚV は「美しく正しい」アイスランド語で放送を行うべきであるというポリシーを改め、外国訛りのアイスランド語による放送も行うようになった。話者が約 38 万人と少ないアイスランド語は、現在常に言語存続の危機にさらされている。柔軟に形を変えながら日々変化するアイスランド語をめぐる現状において、エーレンデュルのように「純粋な」アイスランド語に固執する考えは決して主流なものではない。しかしこのエーレンデュルの態度には、人口の少ない小さな島国の大きな世界への接続と、それに伴う大きな言語の変化への当惑が見受けられる。

また「チェスの駒としての島」という、島の外部圧力に対する脆弱さやその懸念は、エーレンデュルはシリーズ 5 作目の『厳寒の街』の中で「軍隊」を連想する服装に言及する場面にも現れている。

> 「こんな迷彩柄のミリタリーファッションに、なぜ子どものサイズがあるんだ？」
> エーレンデュルがつぶやいた。
> (中略)
> 「流行っているんですよ、こういうパンツ」エリンボルクが言った。
> 「子どもがこんなズボンをはくのがおかしいとでも？」シグリュデュル＝オーリが訊いた。
> 「どうだろう、わからない」とエーレンデュル。それから付け加えて言った。
> 「そうだな。おかしいと思う」(インドリダソン 2022:10-11)

アメリカ軍によるアイスランド駐留が固定化され、国が大きく変化するのを目の当たりにしてきた世代に属するエーレンデュルにとって、ミリタリーファッションというのは驚異

的な異物でしかない。同時に、時代による変化やアメリカ軍の駐留に関わる混乱を知らない子ども世代がそれらをいとも簡単にそれを身につけることへの困惑をエーレンデュルから読み取ることができる。『湿地』においてもファッションへの直接的な言及はないものの、ホルベルク殺害の最初の容疑者として緑色のアーミージャケットを着て、軍靴を履いた若者が登場し、ここでもアーミージャケットは、若者のファッションとして描写されている。

本章では、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて流行した「中世趣味」の一環として、そのロマンティックな「夢の島」の語りと、時にはそれと相反する過酷な「現実の島」の姿を検討してきた。「島なるもの全体は、疑いなくそこに住む人々の性格に影響を与えている(the unity of islands undoubtedly wields an influence over the character of the people who live upon them)」ことから、特に『湿地』にもその影響が見られる島の隔絶性、小国性、そしてその微力さは、エーレンデュル個人のアイスランド人らしさと少なからず関連がある[King, 1993]。エーレンデュルの持つ自主独立の生き方に固執する孤独や葛藤、容易に世界と接続できてしまう当惑は島嶼性に端を発するものである。エーレンデュルの持つ孤独や自己認識にアイスランドそのものが大きく関係している以上、ここにエーレンデュルという一個人とアイスランド全体にかかる島嶼性の接続を確認することが可能なのである。

第３章　湿地の文学としての『湿地』

本章では『湿地』が湿地帯で起きた事件を中心にした物語であり、題辞からも「湿地」が重要なモチーフとなっていることから、「湿地」そのものを中心にしたうえでこの物語の再解釈を行う事を目的とする。ここでは第二章と同様に、物語の舞台としての湿地について検討した上で、現実の湿地とそれを比較して検討する。またここでは、『湿地』と同様に湿地を中心の舞台にした作品を数点挙げ、比較対象とする。序章でも述べた通り、湿地とは「未開」の象徴であり、死を連想させる場所でもある。『湿地』においては社会階層が低い人間が住む場所であり、死体の見つかる場所であり、同時にウイドルへの手がかりとなる写真の発見場所でもある。

まず文学で「自然」を扱うにあたって、自然という概念それそのものについての洞察を述べる。ここでは「自然」を語るならば必然的に問わねばならない、少なくともかつてオックスフォード大学の面接で問われたこともある「ネイチャー(nature)はナチュラル(natural)ですか？」という問いに対しての筆者自身の回答を明示し、立場を明らかにする必要がある。まずオックスフォード辞典によればネイチャー(nature)とは「人間がつくったものではない、宇宙に存在する全ての動植物」や「人間や動物の本質」を意味するもので、「人間が手を加えたもの」をも包括した人間を取り巻く環境全てを指すものであり、厳密な定義はない。故に自然か否かの境界線はしばしば恣意的であり、個人の経験によるものになる。都会で何年も育った人間には都市風景こそが見慣れた自然環境であり、その対となる田舎や農村もしかりである。一方で大文字のネイチャー(Nature)は、人の手や意思が介入していない、所謂テレビ番組やファンタジー小説の舞台となるような大自然を連想させるものである。またナチュラル(natural)とは「(人間の手によって作られていない)自然界に存在していること」や、「(特に食品において)加工がほとんどない、または全くない」状態を指す。仮にナチュラルが「人間の手が全く介入していない」ことを指すならば、現在のネイチャーにおいて人の手が入り込んでいないものなど皆無に等しいだろう。大文字の「自然」を謳うアイスランドの自然環境であっても、それを自然状態に保つための人間の努力や介入があるという点ではナチュラルでなくなってしまう。一方でナチュラルには「人間や動物が生まれつき持ってた性格や行動、能力を描写する際に用いる」、つまり性質を意味する単語でもある。人間が自然を加工して農地にしたり、生きやすいように周囲の自然環境を整えたり、同様に動植物が加工された自然に順応したりして生きているのが人間の本能的な性質なのであれば、この意味において、やはりネイチャーはナチュラルである。

「自然」の語り方の一例として、作家のアーシュラ･K･ル＝グウィンは都市が拡大し、農場や荒野、そして湿地が縮小した世界では人間が他の種から切り離され、違いが強調され、自然と人間の上下関係が定められてから、とりわけ18世紀にヨーロッパで「自然」が発明されてからは、人間は自然の外にいる存在であり、自然の上に立つ存在になったと指摘する。自然を完全に他者と切り離し、支配したかに思われる現代世界においては、ネイ

チャーはナチュラルではないという視点は、かつての自然と人間の共生関係を想像としてよみがえらせるファンタジー小説では重要なものになる。

一方でアメリカのサイエンスライターであるエマ・マリスは「自然は、「私たちと離れたところに」、どこか「遠く」にあると考えるようになった」ことこそが過ちであると指摘する(マリス 2021:37)。同氏は特に自然保護という現実的な問題において、「手つかずの自然」という文化的に形成されたカルト的な考え方を改めないことには問題解決の突破口を見つけるのは困難であり、原風景や野生の喪失を嘆くだけではなく、手つかずの自然など無いとする自然観を推奨している。この見方によれば、ネイチャーはナチュラルであると言えよう。

1. ノワールの舞台としてのアイスランド

自然物とは自ら語ることができないが故に、物語の主題となること自体が少なく、また人間のエゴやもくろみの入り込む余地が大いに認められる擬人化という手法によって在り方を歪められるか、あるいは物語の舞台の演出装置として利用されることもあるのも事実である。ましてや人間を追求することを目的とするミステリー小説や、人間をリアリスティックに描くことを目指すアーナルデュルの作品において、自然は疎外される一番の他者となる。例えば『湿地』で登場回数が最も多い自然物の雨は、単に空間的な暗さを演出するための道具としてしか扱われていない。物語の始め、ホルベルクの死体発見時に「十月の夕暮れ時のレイキャヴィク。雨交じりの風が吹いている」との描写があってから、最後にエーレンデュルとエヴァ＝リンドが会話を交わすなかで「雨は降り続いたが、秋風は強くなかった」という描写まで、物語では終始雨が降っている。ノルディック・ノワールの「ノワール」とは、日が短く、寒くて暗い北欧の風景のイメージに由来するものである(インドリダソン 2012:14,368) [Bergman, 2014]。この風景イメージがノルディック・ノワールの特徴の 1 つとされる、他のヨーロッパ諸国から見てエキゾチックな風景描写の箇所に該当し、本の表紙などにもそのイメージにならう写真が付されていることが多い。ここで重要なのは、ノルディック・ノワールの作品群には視覚的な「暗さ」が求められていることであり、暗雲を伴うその雨は最適な道具なのである。またこの視覚的な暗さは、物語の陰鬱さを強調するのにも役立っている。クエンティン・ベンツ(Quentin Bates)はアイスランドを一見平穏で、牧歌的に見えるものの、その緑青の土地の下で陰謀が渦巻いており、また犯罪率が低い一方で白昼堂々麻薬中毒者がのさばる「奇妙な土地」として指摘している [Forshaw, 2012]。平和状態の土地の下に蔓延る不和はアーナルデュルが主に家族という単位で描いてきたものである。この家族という単位をアーナルデュルが選択したのも、アイスランドという国の気候が影響している可能性がある。無論 2 章で述べたような国自体の矮小姓や隔絶性から大規模な犯罪ではなく、身近で小さな犯罪しか扱うことができないという事情もあるが、ノワールの源となる、特に冬の寒くて暗い気候は人を家に押し込めるものでもある。

視覚的な暗さのために雨が降り続けていると指摘したが、このまま自然と人間性を完全に別離して結論付けるのではなく、雨を物語全体に通底する時代の流れとよどみのメタファーとして解釈する読みを提起したい。(雨)水は流れ、循環し、時に淀んで溜まるモチーフである。『湿地』では過去軸で明らかになった問題、課題の現代への継承と、国家神話や平和な国家イメージの問い直しが大きな要素としてあげられる。エーレンデュルの語る臓器の収集から DNA 情報の収集へと時代に流れて姿を変えながら続く「個人の悲劇」のコレクションは、流れて循環する雨水の姿と重ねることができる。同様に水の溜まりやすい土地であり、淀みを受け止める湿地は、善悪や真偽が泥沼化した現実の姿と重ねて見ることができる。泥沼化した現実から生じる独善的な使命感や欺瞞、それ故の悲劇の体現者としてのエイナルを見届ける最後のエーレンデュルの観察者としての姿勢は、ウイドルの墓を掘り起こす際の「墓の中まで降り落ちる雨」を見つめる姿で暗示されているのである(インドリダソン 2012:155)。このように、良くも悪くも人間至上主義に見えるミステリー小説の中で登場する自然も、時に重要なメタファーとなったり、人間性に共鳴したりして書かれることもあり、単に暗さの演出装置以上の役割を果たすものとして読むことも可能なのである。

2. 文学の湿地

続いて文学の中における湿地の描写について検討を行う。序章で湿地が主にイプセンやダンテによって人間にとって敵対的な自然であるが故に悪の温床のように書かれていることは述べたが、ここでは『湿地』のほかエドガー・アラン・ポー(以下：ポー)やトルーマン・カポーティ(以下：カポーティ)、ディーリア・オーエンズ(以下：オーエンズ)など、比較的近年の作家による湿地の登場する作品から、その描写の傾向を探る。またここでは湿地と同時に沼地[13]も登場するが、沼地も湿地の一種であること、湿地と沼地の差異は水深の深さや植生のみであり、水の流れと淀みを受け止める土地であり、陸地と水域の境界線であるという性質が同じものであることや、英語版の『湿地』においては“Mýrin”の訳語が“Swamp”であることを加味した上で、本稿ではその差異については問わないこととする。

湿地を死のイメージと直結させるものとして扱っているのが、ポーの『アッシャー家の崩壊』(“*The Fall of the House of Usher*”：1839)とカポーティの『沼地の恐怖』(“*Swamp Terror*”：不詳 1940-1942 とされる)である。ポーの『アッシャー家の崩壊』では、題辞に付されているド・ベランジェの引用、「彼の心はあたかも張りつめたリュートのようだ。ひとたび触れれば、たちまち共鳴してしまう」という言葉にあるように、共鳴が物語の中枢を占める要素になる。主人公が旧友ロデリック・アッシャーの屋敷を訪問し、そこでロデリックの双子の妹マデラインの死と再生などの不可解な出来事に見舞われるという話だが、

[13]「湿地」、「沼地」の単語の選択に関しては、各作品の日本語版で使用されているものに準ずる。翻訳小説においてはしばしばこのような意味の断絶や言語の複雑さ故の不一致が起こりえる。

物語ではロデリックの精神状態とアッシャー家の屋敷とが共鳴しており、共生状態にあると言ってもいい。

ポーは自然について、神の手によって作られた自然より、人間自身が「天使」と呼ばれる超人的な精霊のような存在の介入によって新しく創造した美的風景の「第二中間の自然」と呼ぶものの方が、美しさが増しているとし、更にこれを超人的存在の意思が働いているという点で、一種の自然であると認める立場にあった[前田 1974:44-46]。このポーの自然への言及から垣間見えるのは、ポーは霊的な存在を信じ、自然には何らかの精霊的存在の介入がるが故に超人的存在の介入の有無に自然か否かの境界線を委ねており、逆説的に全てが人の手に依るものに関しては自然と認めないという立場を示しているのである。それ故にポーは、「ごくごく普通の自然界の事物が組み合わさって人間を感化する力を発揮することがあるのは当然としても、それでもなお、まさにその感化力を分析しようとするのは人智の及ばぬところだ」と主人公であり、物語の観察者となる語り手に超人的な存在の介入を仄めかす発言をさせ、ロデリックの持つ特殊な感化力や人間の様相をしたアッシャー家の屋敷という物語上の謎に対しては、屋敷という風景の背景に「第二中間の自然」における超人的存在という回答を与えているのである。

本論でこれ以上に問題にしたいのは、このアッシャー家が沼地に建ち、最後はその屋敷が屋敷の主ごと沼地に飲み込まれるという結末である。ポーは他作品との比較の中で湖と沼を明確に対比させている。前者の湖は澄んでいて美しい水域で、後者の沼は淀んで「死の世界への通路」として描かれており、一方が生を司り、他方が人間の生を奪い取る場として描写されている[前田 1974:47-56]。精神疾患を患っているロデリックは錯乱し、それに共鳴するようにアッシャー家の屋敷も崩壊への足取りを強め、屋敷の外では嵐が激しくなるなかで沼はその重みを増していく。そして屋敷の存在と共生関係にあるアッシャー家がロデリックの死によって途絶えたために、屋敷の地盤となる沼が全てを飲み込むという連鎖が起こり、この点では沼地も共鳴の連鎖の中にあり、同時に死と崩壊という一連の連鎖の終着点でもある。また、死亡したと思われたマデラインは屋敷の地下で棺に収められて安置されるが、実はまだ息があり、早すぎた埋葬を非難するために甦り、ロデリックを殺す。ここでは地下、つまり「黒々と輝」く死を象徴する沼地に近づき、沼地の映った「上下があべこべになった」アッシャー家では生死があべこべになり、甦って姿を現したという読み方が可能である。いずれにせよ『アッシャー家の崩壊』では沼地は死を象徴するものとして描かれている。

『沼地の恐怖』では更に直接的に死と沼地が結び着けて描き出されている。ある少年ジェプが森に隠れたという殺人犯を見つけるために、友人レミーと飼い犬ピートと一緒に森へ捜索に向かう短編小説で、ジェプは沼地でレミーが殺人犯に殺される現場を木の上から目撃することになる。ここで沼とは、題名の通り恐怖の対象であり、死の現場である。「大きな白い花を付けたマグノリアの大木が光を遮っている。この花に――死の匂いがあった。」という描写からは、沼地という土地、土壌そのものに死へと誘う臭気が対込めて

いることが示唆されている。飼い犬ピートは沼地を有する森に生息する蛇に噛まれて絶命し、不安や緊張が高まるなか、恐怖で森から家へ先に引き返したはずの友人レミーは、捜索していた殺人犯によって沼地に頭を押しつけられて殺されてしまう。主人公ジェプは友人が殺される一部始終を沼地に生えるスズカケの樹の上から目撃し、最終的に大人の捜索隊によって救出されるものの、気が触れたのか、安堵と後悔の入り交じった引きつけるような笑みを浮かべる。ここでもポーと同様に湿地との距離が問題となっている。沼地に近ければ近いほど、初期ロマン主義から湿地、沼地に付与されてきた死や悪との距離が近づき、やがて飲み込まれるか、同一化してしまう。距離を取っていたとしても、沼地の森の木から死の匂いが立ちこめているように、その場全体が死や悪が展開する舞台となってしまい、人間もそれに感化され、共鳴してしまう様相が『沼地の恐怖』から見受けられる。

この「距離」という問題は、『湿地』のなかでもマリオン・ブリームとエーレンデュルの会話で重要なキーワードとなって浮上する。マリオン・ブリームは捜査を進めるエーレンデュルに、事件に肩入れしないように適切な距離を取ることをアドバイスし、エーレンデュルはホルベルクやエットリデという悪党や、グレータルの死体やウイドルの墓暴きにうんざりし、これらの目を覆いたくなる様な悪逆や死と、自身の間に距離が存在しないだと吐き捨てる。さらにホルベルクのアパートは耐えがたい臭気が充満しており、これは湿地に建ったアパートであるという事情に加えてグレータルの死体が長い期間埋まっていたことが原因であり、カポーティの言う「死の匂い」がしていたことになる。アメリカ軍の駐留という事情が背景にあるとは言え、都市の開発に伴って臭いものに蓋をするように埋め立てられ、現代的なコンクリートの蓋をされたかに思えた湿地は、しかして沈み、匂いが溢れ、死や悪が床下を突き抜けてエーレンデュルの頭を悩ませる。盤石に思えたノルデユルミリのアパートも、最初から死や悪のイメージとの距離など無かったというのがエーレンデュルの言い分であろう。この点では『湿地』の従来の湿地のイメージを踏襲しているかのように見える。一方で『湿地』の舞台となる湿地とポーやカポーティの小説の舞台となる湿地の大きな違いとして、前者が埋め立てられた都市の湿地であるのに対して、後者は辺りに木々や森の残る湿地であるという点である。風光明媚な美しい自然ではなく、より魅力に劣る湿地や沼地という地形は、明確に近代と対比されてきた。アーナルデュルはこれまでの湿地のイメージを踏襲するだけでなく、近代化や進歩の過程において見捨てられたもの、無視されてきた醜いものたちの物語の舞台として、湿地を選んだという読み方もできる。「醜いアヒルの子」であり、遺伝子疾患の絶滅という理想を抱いて復讐を決行し自殺したエイナルは、近代化や進歩の犠牲になった個人として読むことで、湿地との高い親和性を見いだすことができると同時に、その苦悩や最後を見届けたエーレンデュルの観測者としての解釈はより一層深いものとなる。

湿地を死の場所であると同時に未開の土地であるとするのがオーエンズの『ザリガニの鳴くところ』(原題“*Where the Crawdads Sing*”：2018)である。この作品においては湿地と沼地を明確に区分した上で、両者を人間の所業とは無関係の、ただそこにあるものとして

描写する。

> 湿地は沼地とは違う。湿地には光が溢れ、水が草を育み、水蒸気が空に立ち上っていく。緩やかに流れる川は曲がりくねって進み、その水面に陽光の輝きを乗せて海へと至る。いっせいに鳴きだしたハクガンの声に驚いて、脚の長い鳥たちが――まるで飛ぶことは苦手だとでもいうように、――ゆったりとした優雅な動きで舞い上がる。
>
> そして、その湿地のあちこちに本当の沼地と呼べるものがある。じめじめした木立に覆い隠され、低地に流れ込んだ水が泥沼を作っている。泥だらけの口が日差しを丸呑みにするせいで、沼地の水は暗く淀んでいる。夜に活動する大ミミズでさえ、この隠れ家では昼の間も動きまわる。もちろん無音というわけではないが、沼地は湿地と比べて静かでもある。分解は細胞レベルの現象だからだ。生命が朽ち、悪臭を放ち、腐った土くれに還っていく。そこは再生へとつながる死に満ちた、酸鼻なる泥の世界なのだ。
>
> (中略)沼地はひっそりと、だが着実に死体を引きずり込み、それを永遠に包み隠してしまう。沼は死というものをよく知っていて、それを悲劇と決めつけることも、むろんそこに罪を見いだすこともない。(オーエンズ 2018:9-10)

著者オーエンズは元々野生動物学者であり、自身のフィールドワークを元にしたノンフィクション作品を『ザリガニの鳴くところ』の発表以前に公開している。その経験が湿地や沼地そのものや植生、動物の描写に活かされている。この物語はノース・カロライナの湿地で発見されたチェイス・アンドルーズの死体に関して、その捜査の過程で殺人の罪を問われた“湿地の少女”と呼ばれる主人公カイアの裁判と、カイアの周りの人物の過去回想や記録が同時進行していく。この物語は貧困や差別など様々な要素を含んでいるが、湿地や沼地が人間と共鳴するものではなくただそこにあるものとして描写していること、そして社会において家族に 1 人湿地に置き去りにされ、周縁化された存在のカイアが現代世界にとって他者化された自然の、とりわけ人類によって脅威となりえる湿地に住まう存在である点は、ポーやカポーティとは異なる視点で興味深いものである。他にも沼地を含んだ湿地がそれぞれ死と生の性質を持ち、循環するイメージを沸き立たせる描写は、野生動物学者としてフィールドワークを行った経験から得たものであろう。同時にポーやカポーティの作品と異なり、ラムサール条約が発効した 1975 年以降の、地球上における湿地の重要性が再確認された時期以降に執筆、発表された作品であるのも、物語内の湿地の位置づけに大きく関与している。一方で、湿地と沼地に善悪の属性をつけたこと、それぞれに分かりやすい二元論的な善良な青年と卑怯な青年のキャラクターを重ねて表象したこと、そしてカイアの悲壮な人生や生活に湿地でしか生きていけない少女という設定を当てはめ、十分な教育が受けられず、裁判では言葉を発しない野蛮で未開な“湿地の少女”としてのキャラ

クターは、自然に対して人間の尺度を適用させた価値判断を下しており、既存の湿地、沼地のイメージを転覆させるような作品とは言い難いものとも言える。しかしカイアが湿地の動物や植物を観察、記録する研究者として最後まで湿地で生きていくこと、そして湿地を縮小させようとする動きを否定的に書いていることから、これまで悪一辺倒だった湿地についての解釈を問い直すものであったという側面は大きい。

アイスランドの文学における湿地は、不毛の土地にとってのオアシスであり、同時に危険な地域であったという記述がサガにあり、またハルドウル・ラクスネスの『アイスランドの鐘』(“Icelandic Bell”: 1943)でも深穴や沼、泥炭を含む湿地は「地獄の入り口」であり、「不気味な幽霊」の住処とされる[Huijbens, Palsson 2015:57-59]。また『ヨームのヴァイキングのサガ』では「泥沼のソルケル」という男が登場し、捉えられたヴァイキングの処刑人の役目を負う。ここで強調されているのはヴァイキングの死生観やその勇猛さだが、処刑人という死の権化に「泥沼」という渾名をつける背景には、沼地がならず者を追放する場であったり、死を想起させたりする場所として、根源的な恐怖を煽る場所であったことも要因のひとつであろう。

3. 現実の湿地

最後に、実際の湿地の姿から文学イメージとしての湿地を捉え直し、その視点から『湿地』という物語全体の再解釈と、主人公エーレンデュルへの理解の増進を試みる。

自然を知るには、その自然が置かれている国や地域の民族学や地図からの知見が必要であるという観点から、アイスランドにおける湿地の位置を確認しておく。アイスランド人にとって湿地とは利益と不利益を併せ持つ両義的な存在であり、常に何らかの形で湿地を利用してきた。入植して以来、肥沃な土地であるが故に、農地のために環境を整えるといった工夫を加え、食料や肥料となる植物を収穫していた。一方で先述の通り無闇に人間が立ち入れないような危険な地帯でもあり、幽霊の話を創作して湿地から人間を遠ざけようとする実務的な文化活動もあった。しかし18世紀以降、まさにヨーロッパで「自然」が開発され、ヨーロッパの周辺部に置かれるアイスランドにおいても、湿地の必要性は薄まり、また農業器機の著しい変化によって多くの湿地は人間の支配下に置かれ、道路や住宅のために灌漑されて埋め立てられ、モダニズムと対抗する「未開」の烙印を押されることとなった。近年になって、ようやく湿地の必要性が環境保護や自然科学の観点から再確認されるようになった。湿地は生物学的な多様性と、それに比例して多数の生物を有しており、その豊かさはしばしば「生物学的スーパーマーケット」の呼称で例えられている。また地球にとって、老廃物を浄化する作用を担う「腎臓」のようなとしての役割を果たしていることが分かり、その重要性はますます高まっている[Huijbens, Palsson 2015 :53-57]。

しかし依然として湿地は大部分の人間にとって醜い場所であり、ここでは風光明媚でない風景に対する美的概念という先入観と、反対に醜い自然の価値の低下という問題が浮上

する。初期ロマン主義から続くポーやカポーティの湿地への恐怖は、元々の危険性に加えて、まさに醜い自然というものへの先入観から生じたものであろう。一方で、現代ではオーエンズのように悪一辺倒の捉え方からの脱却を試みる物語もある。現代世界において、かつて「未開」とされていた湿地はモダニズムへの対抗として見られる側面もあるという[Huijbens, Palsson　2015 :62-65]。ここでのモダニズムとは、農業の機械化や湿地の埋め立てを指し、湿地や沼地の自浄作用を認めて過度な機械化を批判する動きを対抗と捉える見方がこれに該当する。繰り返しになるが『湿地』におけるノルデユルミリも埋め立てられた、コンクリートで覆われた都市の湿地であり、明確な近代化の犠牲といえる。

自然や風景に美醜の感情を抱くことは否定される行為ではないが、人間の尺度で善悪や美醜の判断を自然に下し、それのみに依った価値判断を行うことは、人間は自然の上に立ち、支配する側であるという「完全な疎外」から脱却できているとは言えない。自然とそれを有する国や地域の民族的・文化的背景を鑑みた上で、先入観や偏見抜きにして物語の後背に置かれた自然や風景を見つめ直す行為は、物語の読みを深めるだけでなく、現実世界の風景の見方をも変える一助になろう。島が海と陸の境界であり、両者の絶え間ない闘争の場であるならば、湿地もまた陸地と水域の境界かつ絶え間ない闘争の場であり、湿地にいたっては境界の狭間にある淀みすら受け止める場でもあり、これらは時にその余波を人間に投げかける。このような敵対的な自然を舞台に欺瞞、混濁した真実、混迷する善悪の物語を与えること自体が、「この物語の不確実性、遺伝子が確約された世界ではないことが人を寄せ付けない風景と容赦ない気候の中で生き延びるための、文化的伝統に根拠を持つ歴史的な闘争と密接に結びついている」という指摘もある [Burke, 2012]。

泥沼や悪、死のイメージの表象としての湿地は無論『湿地』にも見られる。湿地に建てられたノルデユルミリはふたつの殺人現場であるうえ、その場所の臭さは何度も言及されるものである。同時に湿地の本来の姿から『湿地』を問い直すとき、モダニズムへの対抗と水の循環という湿地の要素をエーレンデュルと重ねて見ることができる。第 1 章で述べた通り、エーレンデュルは過去に固執し、現代の変わってしまったアイスランドへの否定的な見解を見せる。現代アイスランドの国民神話、家族、社会を見つめつつ、それに抵抗するような生活を送ることで一種の対抗を行っているのである。そして社会階層が下である人々のための住居であるという点に加えて低地でもある湿地では、上＝地表で都市化や時代の流れの際に生じる、覆い隠されてきた、あるいは取り上げられなかった様々な問題が下に淀みとして溜まっていく。「進歩」という建前を得ながら、連綿と循環する個人の悲劇を踏みにじる行為に、エーレンデュルは湿地が置かれる境遇との共通項を見いだすのである。

ここでは、湿地というものの性質や時代の変遷に伴う立場の違いを、主に文学での表象のされ方という観点から考察してきた。『湿地』では既存の湿地の文化的イメージを踏襲しつつも、現代アイスランドの文脈における湿地の位置を物語に落とし込むことで、現代アイスランド全体の流れと淀みの比喩として機能し、時代の流れと淀みを観測するエーレ

ンデュルの姿との一致を見るのである。

最終章

本稿では、『湿地』を人間性と追求するミステリー小説としてそのキャラクターの人間性を考察した。『湿地』では大がかりな犯罪やトリックという要素がない分、キャラクター達の人間描写に重きが置かれているが故に、ただの推理ゲーム以上の文学性を本作に与えている。同時に普通の個人であるエーレンデュルを主人公に置き、その心情を描く本作では、社会や歴史や時代といった大いなる存在への個人レベルの対抗や、その葛藤が共感の容易さとともに読者に提示される。どんな正義にも暴力は付随し、反対にどんな悪にも正しさが見いだせることを突きつけられ、善悪の曖昧さに困惑し、勧善懲悪的な結末ではなく、起きることをただ見守ることを結末としたエーレンデュルの態度は、二元論的な思考や判断への警鐘でもある。

この個人レベルの対抗や葛藤に重ねられ、また『湿地』という物語に関連する大きな要素であるものの後背に置かれる島、湿地という要素から『湿地』という物語とこれらの自然との関連性を探り、その読みと解釈の拡大を試みた。特に、他のアイスランドの諸地域と比べて突出して近代化したために、他地域と比べて圧倒的に自然が「少なく、その乖離が激しいレイキャヴィクという都市空間で展開される物語では一見無関係にも見える島、湿地という舞台は間違いなく『湿地』のキャラクターの人間描写に影響を与えている。島や湿地というもの全体は人間の性格に共鳴している。特にエーレンデュルというキャラクターは島に生きる者であることを誰より自覚し、湿地の観測者でもあるという点で相互作用の関係性を結んでいる。島というものが持つ無力さや隔絶性はエーレンデュルの孤独と紐付けられ、湿地のモダニズムへの対抗という要素や水の流れと淀みを受け止める土地という特徴は、エーレンデュルのアイスランド現代社会への抵抗と、憂鬱な中年捜査官であり良識ある個人として時代の流れと淀みを観測する目と共通している。

ミステリー小説はその性質上、社会の中で周縁に置かれることの多い「他者」を扱う。同時に自然は人間中心で、その物語の多くが都市で展開されるミステリー小説の中では完全に疎外された「他者」である。これに加えて「異邦人」、則ち「他者」という意味の名前を持つエーレンデュルは、三重の「他者」であるが故に、「他者」－社会的弱者と自然－への共感を惜しむことなく発揮し、それ故に良心の保持者としての役割を与えられていると言える。

推理小説に限らず、語りえないものである自然を排除したり、または過度にロマンティックに解釈したりせず、それが持つ本来の性質から物語を解釈する試みは、近年叫ばれる他者への共感(エンパシー)という点でも有効な手段といえる。同様に都市空間で育ったがために、自然との共生の歴史を想起できない、あるいはその想像に抵抗があるといった筆者の人間にとって、このような解釈は困難を極めるものの、主にヨーロッパで喫緊の課題として環境問題が挙げられるような社会においては、決して無意味なものではない。

エーレンデュルの物語は『湿地』以降も続き、「アイスランド人の話は天気の話に始まり天気の話に終わる」と揶揄されるほど天候や自然描写の多いアーナルデュルの著作の中

では、続刊においても多くの自然が登場する。これらの物語も、ただ文字を追って事件の進展を楽しむ読みに加え、登場する自然の本質を知ることで、さらに深みのある読みをすることが可能だろう。

[参考文献]

Alexander, Elliot. (2021). Health minister proposes drug decriminalization. RÚV.
Ari, Kristinsson, Páll. (2018). National language policy and planning in Iceland – aims and institutional activities. 著: StickelGerhard, National language institutions and national (ページ: 244-249). Research Institute for Linguistics, Hungarian Academy of Sciences.
（https://ritaskra.arnastofnun.is/media/skraning_pdf/National_language_policy_and_planning_in_Iceland__aims_and_institutional_activities.pdf）
Barry, Forshaw. (2012). Iceland: Crime and Context. 著: Forshaw Barry, Death in a Cold Climate (ページ: 127-134). Palgrave Macmillan.
Daisy, NeijmannL.Da. (2017). War and Crime in the work of Arnaldur Indridason. University College London.
David, Caviglioli. (2017). 誰もが本を「読み」「書く」国、アイスランド. COURRiER Japon.
FORMECONOMICWORLD. (2023). Global Gender Gap Report 2023.
GEORGE, ANNAS・J. (2000). RULES FOR RESEARCH ON HUMAN GENETIC VARIATION — LESSONS FROM ICELAND. New England Journal of Medicine, 1830-1833.
（https://scholarship.law.bu.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2300&context=faculty_scholarship）
Giorgio, Brugnoli. (1996). VICTOR HUGO AS A READER OF THE EDDA: HAN D'ISLANDE. CLASSICONORROENA, 3-8.
GULCHERSTEFÁNSSONKÁRI, EFFREY R. (2000). THE ICELANDIC HEALTHCARE DATEBASE AND INFORMED CONSENT. New England Journal of Medicine, 1827-1830.
Hugo, Victor. (1833). HAN D'ISLANDE. Kindle.
Indriðason, Arnaldur. (2009). Jar City. Vintage Books.
Kerstin, Bergman. (2014). The Captivating Chill: Why Readers Desire Nordic Noir. Scandinavian-Canadian Studies/Études Scandinaves au Canada.
（https://scancan.net/index.php/scancan/article/view/100）
Kristín, Jóhannsdóttir, M. (2014). An Interview with Arnaldur Indriðason by Kristín M. Jóhannsdóttir. SCANDINAVIAN-CANADIAN STUDIES/ÉTUDES SCANDINAVES AU CANADA.
Lucy, Burke. (2012). Genetics at the Scene of the Crime:DeCODING Tainted Blood. Liverpool University Press.
（https://muse.jhu.edu/pub/105/article/480111/pdf）
Morris, William. （1871-1873）. Journals of Travel in Iceland. The Collected Works of William Morris: Volume 8
Noemi, Ehrat. (2018). The Icelandic Opioid Crisis: Iceland Approaching U.S. Numbers in

Drug-Related Deaths. The Reykjavik Grapevine.
Rebecca Thandi Norman. Popular, Historical, and Beautiful Icelandic Names. Scandinavia Standard.
https://www.scandinaviastandard.com/popular-historical-and-beautiful-icelandic-names/
Russell, King. (1993). THE GEOGRAPHICAL FASCINATION OF ISLANDS. 著: Douglas G. Lockhart. Schembri, David W. Smith Patrick, THE DEVELOPMENT PROCESS IN SMALL ISLAND STATES. Routledge.
Susanne, Hagen. (2022). 2022: more domestic violence in Iceland. RÚV.
Tim, Marshall. (2015). Prisoners of Geography. Elliott and Thompson Limited.
Nanna Gunnarsdóttir ロマンチック・アイスランド Guide to Iceland
https://guidetoiceland.is/ja/best-of-iceland/the-most-romantic-places-in-iceland
Wyeth Grant, Sigrún, Sif, Jóelsdóttir. (2020). The Misogynist Violence of Iceland's Feminist Paradise. FP.
アーシュラ・K・ル＝グウィン (2011) 『いまファンタジーにできること』訳:谷垣暁美、河出書房新社
アーナルデュル・インドリダソン (2012) 『湿地』訳:柳沢由美子、創元推理文庫
アーナルデュル・インドリダソン (2013)『緑衣の女』訳:柳沢由美子、創元推理文庫
アーナルデュル・インドリダソン (2018)『声』訳:柳沢由美子、創元推理文庫
アーナルデュル・インドリダソン (2020)『湖の男』訳:柳沢由美子、創元推理文庫
アーナルデュル・インドリダソン (2022)『厳寒の町』訳:柳沢由美子、創元推理文庫
エドガー・アラン・ポー (2017)『黒猫・アッシャー家の崩壊』訳:巽孝之、新潮文庫, 153-191
エマ・マリス (2021) 訳:岸由二、小宮繁『「自然」という幻想　多自然ガーデニングによる新しい自然保護』 草思社文庫
外務省 (2023).アイスランド基礎データ
(https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/iceland/data.html#section1)
スティーブン･A･ロイル (2018) 訳:中俣均『島の地理学―小さな島々の島嶼性』 法政大学出版局
清水誠 (2009)『北欧アイスランド文学の歩み―白夜と氷河の国の六世紀―』現代図書
大島美穂 (2022)「第二次世界大戦と北欧諸国」百瀬宏、熊野聰、村井誠人 編『北欧史 下』、山川出版社：110-142
入江浩司 (2016)「アイスランドのノーベル賞作家」 小澤実・中丸禎子・高橋美野梨 編『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための 65 章』明石書店
谷口幸男 (1979)『アイスランド・サガ』新潮社
谷口幸男 (2017)『 エッダとサガ』新潮選書
トルーマン・カポーティ(2022)『ここから世界が始まる トルーマン･カポーティ初期短篇

集』小川高義訳、 新潮文庫
ハワード・ヘイクラフト (2003)『ミステリの美学』 訳:仁賀克雄、成甲書房
ホルヘ・ルイス・ボルヘス (2019) 『夢の本』訳:堀内研二、河出書房
羽田理恵子(2019) 「2 週間ごとに言語が消滅する―アイスランド、自国語の存続をかけた奮闘」 AMP
坂西紀子(2022)『北欧中世史の研究 サガ・戦争・共同体』刀水書房
前田礼子 (1974)「 E・A・ポウの 『アッシャー家の崩壊』 の風景をめぐって」『 大手前女子大学論集』 47-56
廣野由美子(2009)『ミステリーの人間学―英国古典探偵小説を読む』 岩波書店